

「車屋謡本」新考(七) : 第二章 鈔写車屋謡本(その六)

表, 章

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

85

(発行年 / Year)

1997-07-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020491>

「車屋謡本」新考(七)

——第二章 鈔写車屋謡本(その六)——

表 章

本稿は、すでに六回分を発表した同題の論考——第一回分(はしがき・序説・第一章)は『能楽研究』十三号(昭和63年3月)に、第二回分(第二章その一)は『法政大学文学部紀要』三十三号(昭和63年3月)に、第三回分(第二章その二)は『能楽研究』十四号(平成元年3月)に、第四回分(第二章その三)は『能楽研究』十七号(平成5年3月)に、第五回分(第二章その四)は『能楽研究』十九号(平成7年3月)に、第六回分(第二章その五)は『能楽研究』二十号(平成8年3月)に載せた——の続きである。第四回分には別稿の形で「車屋謡本」曲名一覽表」を付載している。

凡例的事項は第一回分の序説(二)に記したが、本論考全体が江島伊兵衛氏著『車屋本之研究』(昭和19年11月15日刊)の増訂を目的としており、文中の「江島本」とは『車屋本之研究』のことである。また、車屋謡本の各種や関連資料を「資料ナ(《下間本》)」「《下間本》(資料ナ)」などの形で示すことが多いが、車屋謡本関係の資料一覽や略称・略号も第一回分の序説(二)に掲出してある。ただし、前回に紹介した《忠教》(資料ヲ)のような新出資料もあり、若干の変動を生じてはいる。

当初に五回程度に分載を予想していた本論考は、すでに四四〇頁近くを費しているながら、七回目の今回もまだ第二

章が終わらず、次回まで第二章が続く。その「第二章 鈔写車屋謡本」の項目のみを、以下に再掲しておく。

一 曄道博士旧蔵天正三年宗晰署名三番綴本(資料タ《曄道本》)

二 天正期の卷子本五種(資料チ・ツ・テ・ト・ヤ) 三 下間少進法印手沢五番綴本(資料ナ《下間本》)

四 文禄前後の小謡二種(資料ニ・ヌ) [以上、第二回分]

五 文禄前後の曲舞二種(資料ネ・ノ) 付 浅井家旧蔵曲舞集『曲海』(資料ロ)

六 吉川家旧蔵鳥養道晰手沢本(資料ハ《吉川小本》) 付 永禄二年本転写『鳥養宗慶所持書札法』(資料キ)

[以上、第三回分]

七 毛利家旧蔵文禄二(慶長二年)道晰奥書五番綴百番本(資料ヒ《毛利本》)

付 毛利本転写五番綴百番本(資料ヨ《田井本》) [以上、第四回分]

八 吉川家旧蔵文禄五年道晰奥書五番綴百二十番本(資料フ《吉川大本》)

九 高安博士旧蔵本二種(資料ヘ・ホ) 付 慶長二年道晰奥書三番綴別本(資料マ)

一〇 慶長四年沙弥道晰奥書二番綴本(資料ミ) [以上、第五回分]

一一 鳥養宗晰・鳥養休右署判一番綴本(資料ム) 付 車屋休衛門節付本転写《羅生門》(資料ワ)

一二 野上博士旧蔵無署名一番綴百番本(資料メ《野上本》) 一三 薄田宛宗晰奥書卷子本《忠教》(資料ヲ)

一四 無署名五番綴升型百番本(資料モ《田中東大本》) [以上、第六回分]

一五 車屋本系写本各種

1 吉川別本(資料ユ) 2 竜大本(資料ラ) 3 菊屋本(資料リ) [今回分]

4 岩国徴古館本(資料ル) 5 菊屋別本(資料エ) [次回分]

一五 車屋謡本系写本各種

第二章の前節(一四)までに考察したのは、鳥養宗晰(道晰)およびその子の鳥養休右衛門(新蔵)の奥書や墨印があって、彼等父子が本文の書写や節付に参与したと認められる謡本、または奥書や墨印はないが書風などから宗晰(道晰)の関与が確実視される謡本——「車屋謡本」の定義内に収まる謡本——であった。それらとは別に、奥書や墨印がなく、形のみから車屋謡本に加えることはできないが、書風が鳥養流系で道晰父子の筆跡に近似(または酷似)しており、かつ詞章も車屋謡本と同系で、内容面から車屋謡本に加えてもよいのではないかと迷った本や、書風は鳥養流とは別であるが内容面で車屋謡本の特色を継承しており、車屋謡本の後世への影響などを考えるのに有用な本が、かなり多数伝存している。それらの中から、まとまった番数が一括されている形の本だけを選び、本節でまとめて紹介・考察しておきたい。車屋謡本に劣らず資料的価値の高い本も含まれているはずである。

1 吉川家旧蔵車屋謡本系五番綴百番本(資料ユ《吉川別本》)

かつて鴻山文庫に所蔵されていたことのある本である。江島伊兵衛氏が写本の車屋謡本調査のために東京の吉川元光子爵邸を訪れたのは昭和18年になってからで、数度にわたることが「江島本」四四頁前後の記事から知られるが、その際に江島氏が撮影されたフィルムの中に、ややピンボケながら本書の本箱が写されており(写真97)、本書が岩国吉川家旧蔵本であったことは確実である。同じく同家旧蔵の資料ハ《吉川小本》や整版車屋謡本と共に、昭和24年に鴻

山文庫に移ったのであろう。この本を《吉川別本》(資料ユ)と呼びたい。第一回分に掲載した資料一覧や『能楽研究』17号に別稿の形で載せた「車屋謡本」曲名一覧表」でもその名を採用している。

昭和40年3月付けで(実際には6月に)刊行した『鴻山文庫本の研究―謡本の部―』には《吉川別本》が収められていないが、表は昭和30年代初期にすでにこの本を調査しており、『鴻山文庫本の研究』の当初の原稿には同書分も含まれていた。後述するような事情で同書に《吉川別本》は収められなかったが、伊藤千里氏(当時の能楽研究所事務職)に浄書してもらった原稿は表の手元に残してあったので、それを、各冊の略号が「イ〜ネ」なのを「①〜⑳」に変更した(本稿での各本の略号との混同を避けての処置)以外は原形のまま、左に転載しておく。

22 慶長頃筆 吉川家旧蔵本 二十冊

〔曲名後記〕 綴帖装。美濃本(二五八×一八一)。五番綴。金銀切箔を散らした濃緑・茶・黄・薄紫の色替り表紙で、見返しも橙色の紙の全面に金砂子・切箔を散らす。題簽は金泥入り色替り(赤・青・黄)の大形のもの(一六九×六六)を表紙の中央上部に貼り、五番の曲名を右上・左上・中・右下・左下の順に墨書す。料紙はすべて上質の斐紙。内題入りで片面六行書。四段抽斗・懸戸付の黒漆塗り(金銀蒔絵で松を画く)の箱入。吉川子爵家旧蔵本で、文庫所蔵の謡本中最も豪華美麗な本。

各冊とも奥書がないが、車屋本と関係のある本らしい。本文は御家流の達筆で、車屋道晰自筆に非ざるかを疑いたくなる程であるが、他の道晰自筆本の書体と比較すると、整い過ぎた感じで個性が無く、同筆とは言えないようである。節附の記号(殊に「しほる」)がとかく勢いが無いのなども、節附に慣れない人の手に成る本であることを示すかと思われる。内容的にも、野宮のキリの返し、盛久などでは車屋本の特徴を失っている点があり、車屋本の墨符の特色である「くる」がほとんど使用されておらず、真盛・松風・烏頭などに稀に姿を残しているだ

けである(もつとも「くる」は17の毛利本も版本に比べると大分少ないが、本書ほどではない)ことも、本書を車屋本の一つに算えることを躊躇せしめる点である。しかし、高砂に相生の古名を残し、道成寺ワキ語りに旅僧が日高川を泳ぎ渡ったことがあるなど、車屋本独自の特色が多く残されているので、車屋本系統の本であることは確実に、書写年代も江戸初期を下るものではあるまい。毛利家や吉川家に多数の車屋本が所蔵されていたことを思えば、或いはそれらを祖本として能筆の人に書写させた本であろうか。

曲名は次の通りであるが(文字は内題による)、幽霊熊坂・鍾馗・羅生門の三番は、車屋写本には発見されていない曲である。

- ① 相生・田村・遊屋・春日龍神・三井寺。
- ② 老松・兼平・楊貴妃・鍾馗・卒都婆小町。
- ③ 呉服・朝長・井筒・船弁慶・蟻通。
- ④ 金札・源氏供養・浮舟・幽霊熊坂・誓願寺。
- ⑤ 当麻・夕顔・羽衣・殺生石・玉鬘。
- ⑥ 難波梅・屋嶋・定家・黒塚・百萬。
- ⑦ 放生川・通盛・采女・紅葉狩・花月。
- ⑧ 矢立賀茂・恒正・千寿・葵上・歌占。
- ⑨ 漢陽宮・三輪・烏頭・項羽・籠太鼓。
- ⑩ 邯鄲・融・是害・阿漕・船橋。
- ⑪ 養老・頼政・野宮・山祖母・関寺小町。

- ⑫ 白鬚・箆・芭蕉・張良・盛久。
 ⑬ 嵐山・東岸居士・二人閑・羅生門・蘆刈。
 ⑭ 皇帝・自然居士・杜若・昭君・富士太鼓。
 ⑮ 龍田・藤戸・鶉飼・女郎花・狸々。
 ⑯ 弓八幡・真盛・松風村雨・鞍馬天狗・柏崎。
 ⑰ 白楽天・忠度・江口・道成寺・通小町。
 ⑱ 鶉羽・清経・軒端梅・鶉・錦木。
 ⑳ 西行櫻・松虫・葛城・放下僧・姨捨。
 ㉑ 海士・太刀堀・檜垣・角田川・藤永。

〔以上〕

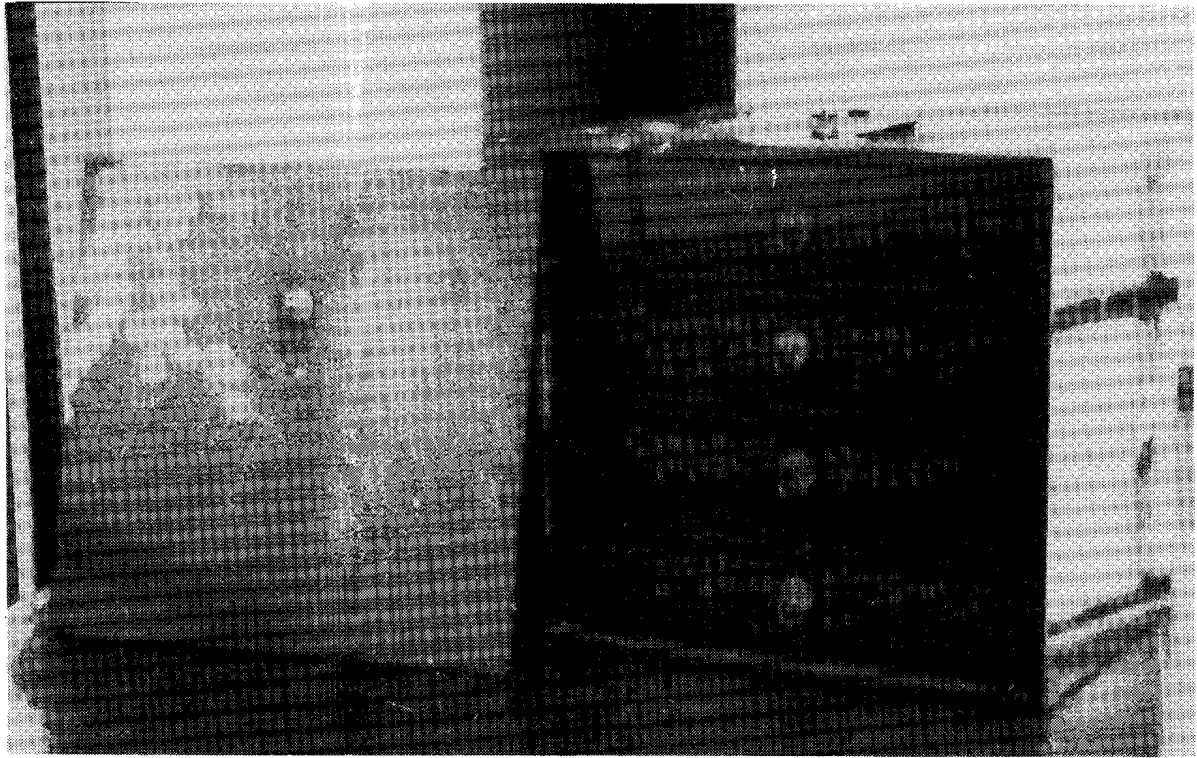
冒頭に「22」の番号があるのは、『鴻山文庫本の研究』第一章「鈔写謡本」の「二 下掛り謡本」の「21 道晰筆卷子本曲舞」(車屋本の最後)の次に位置せしめる予定だったことを示し、同書同節の体系がかなり整った段階で右の解題が書かれたことを思わせるが、他書の解題では書名の直後に列举するのを原則としている曲名を右解題では末尾に列举しているなどの相違もあり、最終段階の解題原稿でもないようである。いずれにせよ、表が『鴻山文庫本の研究』第一章に取り組んでいたのは昭和30年代前半のことであり、その頃に書いた解題である。早い時期のものだけに今の眼で見ると不備が多く、抽斗の前面に所収冊の曲名が書かれている(銀泥?)ことに言及せず、何に基づいて冊順を定めたかも明記せず(抽斗前面の曲名順に従っているらしい)、扉題の有無にも触れていないことなどが、特に目に立つ。が、資料ユ(吉川別本)の概要は右に引用した昔の解題でほぼ把握できるであろう。

少々追加すれば、他の車屋謡本に含まれない曲として挙げた三番——鍾馗(②)・幽霊熊坂(④)・羅生門(⑬)——以

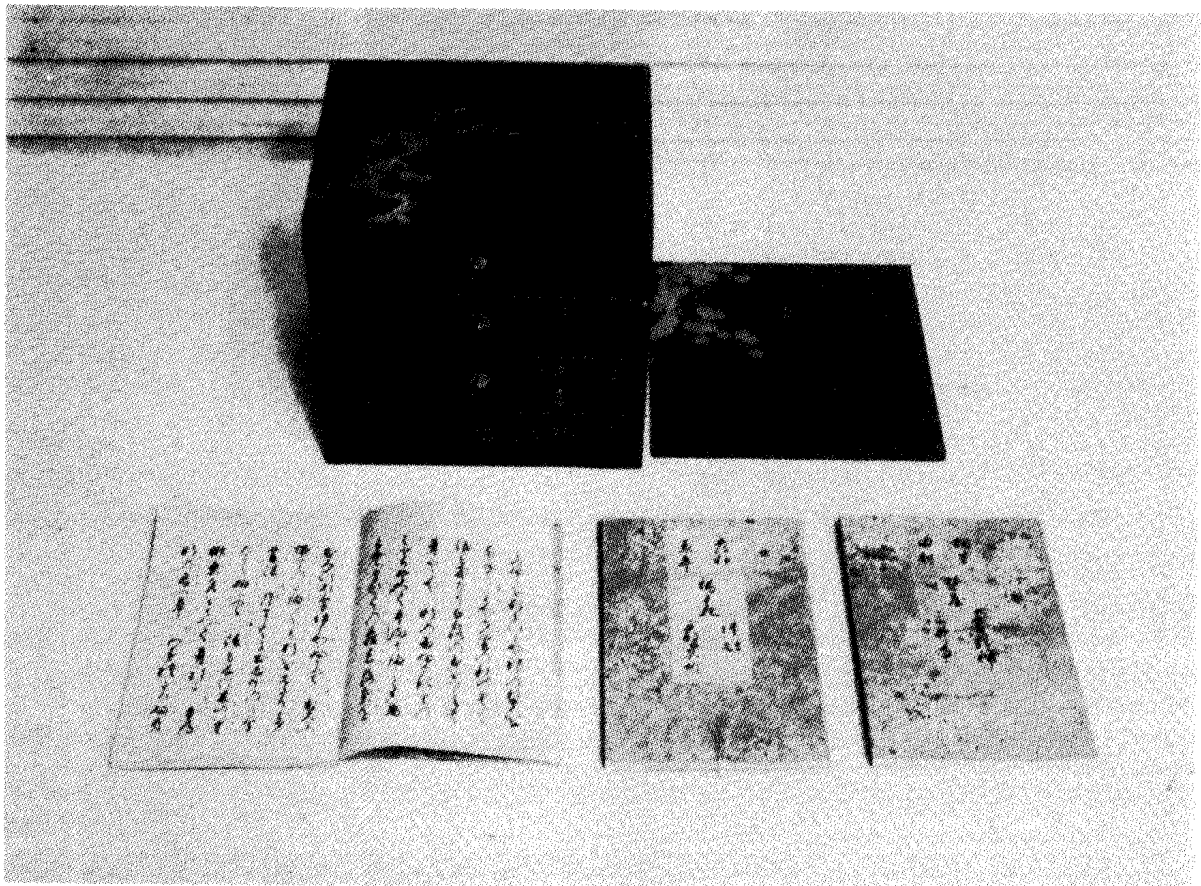
外の車屋謡本としての稀曲は、〈咸陽宮(9)・箴(12)・張良(12)・太刀堀(20)・藤永(20)〉で、一種か二種の写本にしか含まれていない。また《吉川別本》の五番の編成は、曲趣の異なる曲を当時の分類意識に基づいて組み合わせる傾向がかなり顕著で、脇能・修羅物・鬘物と続く冊が①②③⑥⑦⑧⑪⑫⑬⑭⑮の十一冊にも及び、十一番ある修羅物はすべて第二曲に、十三番ある脇能はすべて第一曲に位置している。《下間本》《毛利本》《田中東大本》《田井本》《菊屋本》などの他の車屋謡本系の曲趣別五番綴本にもこれほど整然と組み合わせられている例はない。近年の五番立て分類の順序とは違って、第四曲に五番目物の類が、第五曲に四番目物が位置することが多いのは、『八帖本花伝書』巻一などに見られる能組編成説(一日六番で、一番に祝言、一番に修羅、三番に鬘、四番に鬼、五番に儀理、六番に祝言)に沿っており、《毛利本》なども同じ立場で編成されている。観世流の版本などでも江戸初期にはこの順序が優勢であったが、本書ほどの方針が徹底している例を見ない。本書がやや後年になって編成されたからではなからうか。

さて、旧解題が車屋謡本として認めるべきか否かを主として問題にしているのは、資料ネ《曲舞本》『能楽研究』14号参照)、資料ハ《吉川小本》(同)、資料フ《吉川大本》『能楽研究』19号参照)などの写本のみならず、第三章で紹介する二種の改版車屋謡本までも所蔵していて、車屋謡本の宝庫とも言える吉川家の旧蔵本であり、書風が鳥養流と同じく御家流系の麗筆でもあるから、当然のことと言えよう。装幀の美麗さにおいて《吉川大本》や《吉川小本》を凌ぎ、江戸初期作らしい蒔絵入り本箱に納められていて吉川家において格別に大切に取り扱い扱われてきたように思われたことも、いっそうその疑いを強めた。だが、調査の結果は否であった。詞章が車屋謡本系統であることは確かながら、鳥養道晰や子の鳥養新蔵が関与したことを思わせる点が、書風にも節付にも認められなかったからである。

右の原稿を一読された江島氏は、「そうだろうね」という意味のことを言われた。吉川家で同書を調査したものの、一見して車屋謡本ではなからうとの印象を持ち、本箱は撮影したが本文は一枚も撮影せず、『車屋本之研究』にも加



(97) 吉川別本の本箱(江島伝兵衛氏分)



(98) 吉川別本の本箱と一部の冊(古書目録より)

えなかったことを背景にしての御発言であった。

表が車屋謡本ではないとの結論を出したことと関係があるか否かは明らかでないが、その後江島氏は、「この本は鴻山文庫の蔵本に加えないでおいてくれ」と言われた。理由はお聞きしなかったが、多分、他のいい資料が出現した際に交換する候補にするお考えがあったからであろう。そうした事情で、昭和39年に刊行された『鴻山文庫本の研究』に『吉川別本』は加えられなかったのである。

『吉川別本』を江島伊兵衛氏が手放されたのは昭和37年であった。この年夏に全国の古典籍業者が結集した形の三都古典連合会が結成され、結成記念の「古典籍展観大入札会」が十二月に東京と大阪で開催されたが、その際の『古典籍展観大入札会目録』の図版頁に、「25 金春流謡曲百番 安土桃山時代写吉川家伝来」と題して掲載されている写真が同書である。本文頁には「二〇四 金春流謡曲百番 安土桃山時代古写、蒔繪箱入 秀吉愛蔵、吉川家伝来 二十冊」と、「秀吉愛蔵」なる不審な一句が添えられている。その時の入札でこの本がどこに落ち着いたかは聞いていない。鴻山文庫から他に移ることを予想しつつも、世阿弥生誕六百年記念の諸行事などに追われて写真撮影をしておかなかったため、管見では右目録に掲載された写真が『吉川別本』の姿を伝える唯一の資料なので、それを複写させてもらったのが写真98である。すこぶる豪華な装幀であることはこの写真からも明らかであろう。開かれているのは⑱の冊の〈鶴羽〉の一部である。

2 竜谷大学図書館蔵写本版本混在二番綴本(資料ラ《竜大本》)

竜谷大学図書館に「謡曲集 車屋本 三番綴」の名で登録されている全八十一冊二四三番の大部な本である。同図書館所蔵の他の能楽資料と同じく、本願寺伝来本に相違あるまいが、第二章四一に紹介した資料二《古歌謡集》のような「寫字臺文庫」の蔵印はない。この本の存在を知って初めて竜谷大学図書館に参上したのは昭和四十年代中頃であったが、どんな資料があるかの確認程度に終わっていた。江島伊兵衛氏から『車屋本之研究』の増訂を委嘱された直後の昭和四十九年から五十年にかけて、石原清志教授の御協力を得て再調査を行ったものの、資料二《古歌謡集》や資料又《小謡色紙》などの車屋謡本その物の調査を優先し、本書については曲目を確認しただけで写真撮影までに至ってはいなかった。膨大な量なので一日や二日では撮影できなかったからでもあろう。籠谷真知子氏の仲介で特別に願いで全体の撮影を許され、しかもそのフィルムの返還をリーダープリンタで刷り出して整理し終わるまで半年も猶予していただけの便宜を与えられたのは、昭和五十九年のことであった。以下の同書についての考察はその際のプリントに基づいている。竜谷大学図書館の御好意と石原・籠谷氏の御協力にあらためて御礼申し上げる。

(一)書誌の大概

袋綴の大形本(縦241、横188^ミ)。八十一冊のすべてが三番綴で、計二四三番。全冊が青色表紙で、綴糸は白。表紙の中央上部に長形の題簽(「15」までは白茶色で草色模様入、「16」以下は白色)を貼り、上右・上左・下中央の順に三番の曲名を書く。その書体は白題簽分は行書風で本文書風のD分(後述)と似るが、「15」までの白題簽分は楷書風で、鳥養流系

ではない。内題とは表記が異なる曲名もある。表紙見返しは前・後ともに全面銀紙で、王朝期唐紙の雲母模様を思わせる繊細華麗な模様を含む十種以上に及ぶ研ぎ出し模様がある。全冊冒頭に一枚の礼紙を置き、本文は第二紙から。料紙はやや厚手の楮紙主体であるが、写本の分は一様でない。各冊に少々の虫損があり、本文の判読を妨げるほどの所は見あたらないが、小字の加筆注記などに読みにくくなっている所もある。

全冊の表紙右肩に貼られた矩形の図書ラベルには「022/515/81」とあり、冊順は不記。また第一紙右上部に菱十字形の印を押捺した内部に「3878/昭和二 12 8」とあり、昭和十一年に竜谷大学図書館に収まったことが知られる。むろん、本願寺伝来本であろう。二十冊(第一帙のみ二十一冊)をまとめて布貼りの新しい帙に収め、帙の題簽には「車屋本謡曲集 第一(〜四)帙」とある。その「車屋本謡曲集」は通称的なもので、「竜谷大学和漢書分類目録(総記之部)」に記載された「謡曲集 車屋本 三番綴」が正式の登録名称であろう。

八十一冊の内、「1」〜「16」の十六冊は整版車屋謡本ばかり三番を綴じた本、「17」「18」「19」の三冊は一番が整版車屋謡本、二番が写本、「20」以下の六十二冊は三番ともに写本という、版本・写本が混在する謡本である。現形では版本が五十一番、写本が一九二番、計二四三番であるが、原形はもっと多数冊であったことが確実で、何冊かが散佚したものである。そのことについては後に述べるであろう。

なお、本書に含まれる整版車屋謡本については、整版車屋謡本をまとめて考察する次章の中で「竜谷大学本」の名で言及するので、以下では主として写本の分について述べる。

(二)書式・書風をめぐって

写本の一九二番は全曲に内題があり、片面七行に書く。版心上部に「幽熊 三」などの形に曲名(またはその略記)

と丁数を記すのは、整版車屋謡本の形に揃えたものであり、版本を補う形でより多くの番数を書写し、版本・写本一体の大規模な揃い本を作るのが当初からの目的だったことを示している。書面の広さは縦190、横160^ミ前後で全曲ほぼ整っており、内題の位置も統一されている。

その書風は総じて御家流系の麗筆で中には鳥養道晰の筆跡かと疑われるものもあるが、一筆ではなく、少なくとも三筆以上、細分すれば四筆以上が混在すると認められる。一冊に別筆が混在するので、後掲の「四曲目一覽」では曲名の上にA～Dの記号を添えてその別を示した。

まずA書風は、写真99・100のように丸みを帯びた柔らかい書風で、写真99 1行目の「いかにも御心」のように、多出する「心」の字体に際立った特色があるのを初め、顕著な書き癖が多いので、判別が容易である。写本一九二番の三分の二にあたる一三〇番がこの書風で書かれており、全体の書風をAとその他に二分してもよいほどである。B書風は六番だけで、写真101がそれである。硬い感じでかつ文字が大きいので、これも識別し易い。他の書風の曲はみな丁の表側(見開きの左頁)から書き出しているのに、この書風の六番の内二番(「54」の〈鞍馬天狗〉と「72」の〈項羽〉)のみが丁裏(見開きの右頁)から始まっている書式の相違も、筆者が別人ゆえの現象であろう。C書風分は七番だけで、写真102がそれである。Aよりはやや硬い感じであるがBほどではなく、Bよりは文字が小さい。個々の字体はDと極似し、Dと同じ筆者が時を隔てて別の筆で書写したものと疑われるが、印象がかなり違うので別にした。D書風は49番に及び、写真103・104がそれである。実は書風の幅が広く、やや硬い感じで、整版車屋本の字体に近似しているように思われる。細分を試みたものの判定が容易でないため、結果的にはD書風としてまとめざるを得なかった。

右の四種の書風の内、B・Cは近い曲(謡われることが多く、百番本などに含まれる比率の高い曲。その逆が遠い曲)に限られている。AとDとでは格別に目立つ差異はないが、車屋謡本やその同系本に含まれていない曲——「車屋謡本

曲名一覽表」に曲名が掲出されていない、「(四)曲目一覽」で曲名下に●印を添えた曲——の大半はA書風で書かれている。●印計五十七番の内の五十番までがA書風であり、A書風の筆者が主に遠い曲の書写を担当したようである。次項に述べるように、節付皆無の曲十九番がすべてA書風であるといった片寄りも見られる。

奥書・識語の類がどの冊にもなく、厳密な意味での書写年時は不明とせざるを得ない。確かなのは整版車屋謡本が刊行された慶長六年(一六二〇)以降ということだけであるが、装幀・書式から見て元禄まで下る本とは思えない。江戸初期の写本と幅広く把握しておくのが無難であろうが、ヤア・ヤヲハ式の間拍子を加えるのが版本謡本の常になった寛文(一七〇〇)以後にまで下ることはまずないものと思われる。

(三)節付・加筆をめぐって

一九二番の写本の内、十九番には節付が皆無であり、別に「して・わき」などの役名や「次第・上」などの小段名や歌い手の変更を示すへ印だけで、ゴマ点の類の皆無の曲が三番、「しほる」が数例だけでゴマのない曲が一番、後半の節付を欠く曲が一番あるが、他は全体に下掛りの節付がある。その節付の書風にやや幅があり、写本の全体が同一人の節付と断定はできないが、その蓋然性が高いようである。

節付皆無の曲にそれに近い曲を加えた二十四番のほとんどは稀曲に属する遠い曲であり(「(四)曲目一覽」の●印が15、◎印が1、▼印が6。無印の〈祇王・恋重荷〉もかなり遠い曲)、節付の揃った伝本が少なかったらうと思われる曲であるから、《竜大本》の底本にすでに節付がなかったことも考えられよう。「54」の〈祇王〉が《下間本》(資料ナ)でも節付皆無である事実がその推測を助ける。だが、第六項で考察するように《竜大本》は《吉川小本》(資料ハ)とすこぶる関係が深く、《竜大本》の節付皆無の曲の内の六番は他の車屋謡本では《吉川小本》にのみ同曲が含まれている(「(四)曲目一覽」の▼印)が、

《吉川小本》では六番みな節付があるのである。文句はほとんど同じく、同系統の本に相違ないので、底本には節付があったのに《竜大本》がそれを写さないままで終わっている曲もあるのではなからうか。その点からも注意されるのは、《竜大本》の節付皆無の十九番のすべてがA書風で書かれている事実である。主として遠い曲の書写を担当したA書風の筆者に本文書写の後に故障が生じ、節付を加えないままで終わったことも、十分考えられよう。

江島伊兵衛氏が江島本の中で車屋謡本系節付の特色として指摘された「くる」は、《竜大本》の約六十番に使用されている。全体の四分の一なのは少ないようにも見えるが、确实な車屋謡本でも後年になるほど減少の傾向を見せており、平均的な割合に近からう。さすがに他の車屋謡本にも含まれていることの多い近い曲にそれが多く、後掲の「四曲目一覽」に●印を添えた遠い曲でも十五番に「くる」が見られ、本書の全体が車屋謡本系であることを象徴している。それらの「くる」の用法が他の車屋謡本と一致しているか否かまでは精査していないが、大差なさそうである。車屋謡本相互の間でも用法に差異があるのが常であるから、少しの違いはあってもおかしくはあるまい。

また、第二章二一の資料チ《東国下》の考察の中で「車屋本系直し」と仮称した本文書写後の書き入れに相違ない直し(フシの細部についての補助記号)が多く、曲に存在することが、資料ラ《竜大本》の目立つ特色で、それは整版本にも見られ、全二四三番中の二〇二番に及ぶ。「四曲目一覽」に「節付皆無」と注した十九番と「直しナシ」と注した二十二番の、計四十一番だけが例外なのである。このことは、《竜大本》の全体が車屋謡本系統であることを明示していると言えよう。また、謡の稽古と密接につながっているであろう直しが大半の曲に書き込まれているのは、本書またはその底本が謡のテキストとして実際に使用されたことを物語るようにも思われる。もっとも、遠い曲を含めて二百番を越える謡をすべて習う素人は稀なはずであり、むしろ謡を教える側の人の教授用の書き込みだった可能性が強からう。以下に述べる《竜大本》の車屋本系直しの具体相もそれを思わせる。

この車屋本系直しは曲によって精粗の差が大きく、総数が十指に満たない曲もあれば、曲の全般にわたってすこぶる詳細に施されている曲もある。その極端な曲については「(四)曲目一覽」に注記しておいた。また、その直しの性質も他の車屋謡本よりは幅が広いようで、「中・下・上・下持・同吟・ハル・越・不越・持・不持・当・捨・拾・引・不引・うハ声・下声・入」など、他本にも多用されているものがやはり多いが、「廻・不入廻・中ハル・中下持・中同吟ハル」など、他本にあまり類例を見ない用語も見え、「打切・本地・トル・ヨク・ヨスル・一拍・打返・ノル・不乗」などの間拍子・ノリ関係の指定や、「吟ツヨク・弱・吟カハル」などの吟の強弱についての指定もある。「短メニ引・ユリト・ソト・引付・爰元静也・カロク・ソノマ、・ツカス・息ツヨク」など、術語ではない一般語句を用いた具体的な謡い方についての指示も曲によっては多数存在する。《下間本》に多用されていた五声の類はほとんど見られず、「77」の〈国栖〉に「宮・羽」の例を見出ただけである。車屋本系直しにも変遷があるらしい。

これらの多様な直しの大半は本来の節付と同時に書きこまれた——底本にすでに存在したものをそのまま転写した——ものようであるが、位置から見て別時期の追記も含まれるようである。ただし、元来の分との識別が困難で、貼紙による後人加筆ほど後代になっての直しとは思えない。強弱の吟の指定などもかなり早い時期のものらしい。濁点を多用し、「スム・ス」の注記で清音を、「中濁」の語で半濁音を示したりもして、謡曲の発音を調べるにも有用であるが、それらの年時が明瞭でないことが利用上の難点であろう。

右に「スム」「中濁」の指定に言及してハタト気づいたのは、《竜大本》の直しの様相が文禄四年(一五九六)奥書の資料ネ《曲舞本》に酷似している事実である。《曲舞本》の直しの具体例は本章五1に種別に列挙しておいた『能楽研究』14号7・8頁が、音階・声・吟・清濁・間拍子・謡い方にわたる種別も、述語ではない一般語を用いた謡い方の説明にも共通点が多く、ソックリと言っているほどである。《曲舞本》は鳥養道晰の息子の新蔵が所持していた本である。そ

れと一致する直しの書きこまれている《竜大本》も、鳥養新蔵と縁があるのであろうか。このことは第(八)項のまとめの中で再度言及することになる。

節付や謡い方についての加筆だけではなく、「楽・神楽・舞・序舞」などの舞事の指定、「さがりは・はや太鼓」などの登場音楽の指定を初め、本文が記載を省略しているワキの着ゼリフの追記、登場者についての補足、間狂言の形態についての説明など、広義の演出注記の類が、あるいは本来の節付の一部の形で、あるいは本文中の空白や内題下や上部空欄などのさまざまの位置への加筆の形で、すこぶる多く見られることが、本書の写本(一部は整版本も)の特色である。その主要なものも後掲の「(四)曲目一覧」に注記しておいた。異本との校異を詳細に書き入れたり、貼紙でそれを示している曲もあるが、それらは若干時期を隔てての付加で、書風も墨色も異なる。「57」の《花軍》のごときは、全体にわたる詞章の訂正だけではなく、形付や装束付まで詳しく書き入れられている。この曲が復活上演された際の記録と思われるが、これは飛び離れて後代になっての加筆のようであり、仮に《花軍》の復曲の年時が判明しても——元禄五年の真葛原での渋谷三郎右衛門一代能での分(『古今稀能集』)など、江戸時代の《花軍》所演記録は10例を見出だしているが、本願寺での催しは含まれていない——、他の加筆の年代をそれと同時のものとして認定はできない。

〔四〕《竜大本》曲目一覧

以上に言及したことの整理をも兼ねて、ここで資料ラ《竜大本》の全曲目を列記し、各曲の内容上の特色をも注記しておこう。後に言及することの表示をも含めており、左の凡例に従っている。

◇冊ごとの最初に「」に囲んで仮に定めた冊順を記し、その左(各冊第二行の頭)に竜谷大学図書館で四帙に収められていた写真撮影時の冊順を併記した。同図書館での冊順も整版本の分を第四帙にまとめた以外は格別の基準がないようなので、

「」内に記した新たな冊順を定めたもので、整版本だけの分、整版本・写本混綴の分、写本の内の近い曲主体の分、写本の内の遠い曲主体の分の四グループに分けてその順にし、各グループ内は曲柄を考慮して適宜に位置を定めた。

◇曲名の文字は内題に従い、題簽分が異なる曲は「」内に別に記したが、字体の新旧の別は同一視した。曲名下に「(弱法師)」などの形で添えたのは、通常の曲名(または文字)とは異なる曲名や同名別曲の存在する曲についての注記である。

◇曲名の上の*印は整版本を示し、A・B・C・Dは前述した写本の書風の別である。

◇資料ラに含まれる整版本には、整版車屋本の曲末に押捺されているのが常の「沙弥道晰(花押)」の墨印(甲・乙二種)が存在する曲、墨印はないがそれを模写したと認められる署名を末尾に書いた曲、墨印もその模写も存在しない曲の三種があるので、曲名の後にその別を「(墨印乙(または甲))・(印写)・(無印)」の注で示した。

◇写本の分の曲名下に添えた●◎▼▲印は、いわばその曲の車屋謡本系諸本内での頻出度を示したもので、●は「車屋謡本曲名一覧表」(『能楽研究』17号)に曲名すら掲出されていない曲——他の諸本にまったく含まれていない珍曲——であり、◎印は右一覧表には掲出されているが、本章の前節までに言及した車屋謡本には含まれていない曲——本節で言及する諸本や資料ヨ《田井本》や古活字車屋謡本や偽車屋本のいずれかには含まれている曲——である。▼印は車屋謡本系諸本の中では遠い曲を最も多く含む資料ハ《吉川小本》にのみ含まれる曲、▲印はそれ以外の車屋謡本のどれか一種にのみ含まれる曲である。◎と▲にはその曲を含む本の名を注した。無印の分は複数の車屋謡本に含まれている曲——車屋謡本としてはさほど珍しくはない曲——ということになるが、実は珍曲も若干は含まれている。

◇節付が皆無の曲、およびそれに近い曲にはその由を注した。「車屋本系直し」については、皆無の曲と、十指に収まる程度に僅少な曲、およびそれがすこぶる多い曲とにその由を注し、車屋謡本系節付の特色とされる「くる」(他の車屋謡本写本・整版車屋謡本ともにそれが皆無の曲も多い)については使用されている曲にその由を注した。

◇その他、詞章面の特色や、注意すべき加筆・注記の類などを、曲ごとに注した。☆印は冊についての注記である。(既発表の「車屋謡本」曲名一覧表)に《井筒》が整版本で含まれるようになってるのは誤りで、同曲は含まれていない)

- [1] *弓八幡 (無印)
- 77 *金札 (墨印乙) 直しナシ。
- *矢卓鴨(賀茂) (墨印乙)
- [2] *朝長 (印写)
- 76 *忠度 (印写) 直しナシ。
- *真盛(實盛) (印写) 内題下に「狂言いひたて」と加筆。
- [3] *野宮 (無印) 直し僅少。
- 75 *采女 (印写)
- *芭蕉 (印写)
- [4] *定家 (印写)
- 73 *楊貴妃 (印写)
- *千手(千壽) (印写)
- [5] *湯屋(熊野) (印写)
- 74 *松風村雨 (無印)
- *江口 (印写)
- [6] *源氏供養 (無印)
- 71 *玉鬘 (印写) 着ゼリフを上欄に加筆。
- *浮船(浮舟) (印写)

☆(この冊に紙片甲を挟み込む)

- [7] *二人静 (無印)
- 68 *籠太鼓 (印写)
- *杜若 (印写) 着ゼリフを上欄に加筆。
- [8] *関寺小町 (無印)
- 67 *率都婆小町〔卒都婆小町〕 (印写)
- *通小町 (印写)
- [9] *柏崎 (無印)
- 65 *三井寺 (無印)
- *夕顔 (墨印甲)
- [10] *邯鄲 (無印)
- 63 *西行桜 (無印)
- *葛城 (墨印乙)
- [11] *鷓鴣羽(=鶉羽) (無印)
- 66 *当麻 (無印)
- *三輪 (印写)
- [12] *天鼓 (無印)
- 62 *錦木 (印写)
- *鶴 (印写)

[13] * 藤渡 (無印)

69 * 烏頭 (印写)

* 船橋 (印写) 着ゼリフを上欄に加筆。

[14] * 蟻通 (無印)

72 * 女郎花 (無印) 八幡宮参詣後のワキのセリフを行間に加筆。

* 昭君 (墨印乙)

[15] * 融 (無印)

70 * 山婆〔山優婆〕 (無印)

* 姨捨〔姨棄〕 (印写)

[16] * 鶉飼 (無印)

64 * 春日龍神 (墨印乙)。着ゼリフを上欄に加筆。

* 呉服 (印写)

..... [以上十六冊は整版本のみの三番綴]

[17] * 放生河〔放生川〕 (墨印乙)

79 D 白鬚

C 遊行柳

[18] * 通盛 (墨印乙)

78 D 敦盛 クセ出の注記を上欄に加筆。

A 生田敦盛

内題下に「禅鳳夢想五番之内」と注記。

[19] A 鼓瀧

●

80 *小塩

(墨印乙) 余白なく、墨印が末行と重なる。

D 雲林院

▲(下間本) くるアリ。

…………… [以上三冊、一番が版本、二番が写本。以下はすべて写本のみ(三番綴)……………

[20] D 養老

☆(この冊に紙片乙を挟み込む)

9 D 御裳濯

D 鶉祭

▲(吉川大本)

[21] A 大社

▼ 直し僅少。後ツレのはずの天女の役名を「後して」と誤記。

32 A 繪馬

● くるアリ。

A 淡路

●

[22] A 源大夫

▲(吉川大本)

37 A 佐保山

末尾に「女ノ真序ハ此一番ニかきりたる也ノ真ノ序静也 取分大事ノ能也」と注記。

D 玉井

▼

[23] A 志賀

◎(田井本) 直しナシ。着ゼリフを上欄に加筆。

43 A 松尾

●

A 和布刈

▼ くるアリ。

[24] A 道明寺

くるアリ。

3 D 東方朔

内題下に「先殿を出し候 らんしやうにて王臣下出候／狂言いひたて」と注記。
内題に「漢武帝」と肩書があるのは別名のつもりか。

D 西王母

[25] A 右近

くるアリ。

19 A 浦嶋

くるアリ。

A 雨月

くるアリ。直しナシ。

[26] B 清経

くるアリ。

52 B 項羽

くるアリ。右頁から始まる。写真101参照。

B 頼政

くる3アリ。貼紙に「筒井浄妙一来法師」云々の後代の下掛りの文句を記す。原形は車屋謡

本特有の簡略な形。

[27] D 知章

くるアリ。

44 A 俊成忠度

●

A 志賀忠度

●

節付皆無。

[28] D 経正

ワキの名乗りは『下間本』の形。

20 D 現在経政

●

直しナシ。節付はへや同音などのみで役名もなし。

D 籠

くるアリ。クリを「曲上」と誤指定。

[29] A 鸚鵡小町

くるアリ。

40 A 檜垣

A 土車

くるアリ。シテ登場後の次第の文句を反復。初めの分は「下」、反復分は「上」と指定。

[30] A 梅之枝(〓梅枝)

54 A 桜川

文の前後は《吉川大本》と一致する文句。

C 隅田川

くるアリ。ワキ名乗り・語りなど(『能楽研究』19号36頁前後参照)は総じて《吉川小本》に近いが、「梅若丸生年十二歳」を含むなど元安本に近い所もある。

[31] C 富士太鼓

56 C 班女

冒頭の役名は「狂言女」。

C 花月

[32] D 室君

22 A 花筐

くるアリ。行書の「志本る」アリ。「又きり」と注して「安閑止」の詞章を併記。

A 竹雪

[33] A 雲雀山

17 A 佛原

A 求塚

[34] D 幽霊熊坂

◎(田井本・菊屋本・吉川別本) 直し詳細。

4 A 橋弁慶

A 正尊

[35] D あしかり(芦刈)

くるアリ。

12 A 檀風〔壇風〕

直しナシ。「はや太靴／風鬼出ル／打とむる」と注記。

A 大佛供養

◎(菊屋本) 直しナシ。

〔36〕D 岩船

1 D 盛久

くるアリ。「いかに土屋殿」で始まる形。次第は「……後の世の旅でなるらん」

D 歌占

くるアリ。

〔37〕A 木賊

21 A 荇萱〔刈萱〕

末尾の「花は散て」以下はロンギからクセになる形。(かなり遠い曲)

A 松虫

〔38〕A 元服曾我

▲(野上本)

53 A 小袖曾我

くるアリ。

A 夜討曾我

〔39〕D 初雪

直し詳細。内題下に「炭蓮始テ能ノ為禪鳳作いひたて也」と注記。

35

A 高野物狂

● 曲舞はワキが謡い聞かせる形。

A 丹後物狂

● くるアリ。「動アリ」と加筆。

〔40〕D 七騎落

◎(田井本)

47 A 舟弁慶

くるアリ。

D 安宅

勸進帳など直し詳細。文句《野上本》に同じ。

[41] A 蟬丸

15 A 盲景清(景清) くるアリ。次第の地取謡を内題下に加筆。

A 透逃子(≡弱法師) ● 曲名の「逃」字は外題・内題ともに難読文字。

[42] A 豊干 ● くるアリ。内題下に「イ本ニ」と肩書して別種のワキセリフを加筆。

6 A 阿濃(≡阿漕) くるアリ

D 六浦

[43] D 皇帝

11 A 呂后 ● くるアリ。「王雷声ニテ/大臣数多出ル」と注記。

D 咸陽宮

[44] B 自然居士

34 B 是害 くる3アリ。

B 鞍馬天狗 くるアリ。右頁から始まる。

[45] D 竹生嶋 くる3アリ。内題下に「道の道たる時とてやく 金」と異文を加筆。現行諸流の〈呉服〉の

57 次第の文句(…国々豊かなるらん)と同文。

C 鐘馗 ◎ (田井本・吉川別本・菊屋本・徴古館本) クセ前のサシは今と同じ「草虫露に…」の形。

C 野守 くる4アリ。

[46] D 一角仙人

58 D 舎利

D 護應(〓護法) ◎(菊屋本)

[47] A 殺生石

60 A 野干

A 土蜘蛛(土蛛) ◎(偽車屋本)

..... [以上は近い曲が主体の冊。以下は遠い曲が主体の冊]

[48] A 伏見 ◎(菊屋本) 直し僅少。

16 A 吉野(芳野) 直し僅少。シテ登場のサシの後は、下ゲ哥・上ゲ哥の形と、上ゲ哥だけの別の形を併記。

曲舞にクリなし。

A 逆鉾 ● 節付皆無。

[49] A 太山府君 ● 後半(中入前から)節付ナシ。

26 A 輪蔵 ▼ くるアリ。直しナシ。

A 松浦鏡 ▼ くるアリ。直し僅少。世阿弥本とほとんど同文。

[50] D 寢覚 ▼ くる3アリ。注記「天女さがりは」など。

27 A 綾之鼓(綾鼓) ● くるアリ。

A 恋之重荷(恋重荷) 節付皆無。(かなり遠い曲)

[51] A 朝顔(槿) くるアリ。

61 A 空蟬 ● くるアリ。直しナシ。

D 落葉(〓陀羅尼落葉) ▲(毛利本)

- [52] A 雙紙洗〔双昏洗〕 ▼ 直し僅少。
- 55 A 住吉詣 ●
- A 碁〔碁〕 ▼
- [53] A 常陸帶 「さぶらふ」と濁点。(かなり遠い曲)
- 42 D 半蔀夕顔 「はじとみ」と濁る。
- A 虎送〔虎送〕。 ● 直しナシ。
- [54] D 芳野閑 前場のある形。冒頭のサシ・上ゲ哥はワキ。
- 50 A 祇王 節付皆無。(かなり遠い曲)
- A 籠祇王 ▼ 直しナシ。
- [55] A 卷衣(卷絹) ● くる3アリ。クリを「くり」と指定。
- 31 A 狭衣 ▼ 直し詳細。内題下に「吟ツヨク 逍遙院御作」と注記。
- A 反魂香 ● くるアリ。
- [56] D 胡蝶 ▼
- 5 D 冠 ● 「さぶらふ・かたぶひて」と濁点。
- A 羊 ● くるアリ。貼紙による文句訂正が多い。
- [57] A 花軍 ● 直し僅少。詞章の訂正、詳細な型付・衣装付を加筆。実演した際の記録らしい。
- 81 A 愛寿 ▲ (高安本)
- A 木曾 ▼ くるアリ。覚明の役名を「おかし」とする。

- [58] A 摩無野原(真名井原) ● 直しナシ。
2 A 小鍛冶 ◎ (菊屋本) 節付皆無。
A 木引善光寺 ● 節付は役名などのみ。直しナシ。
[59] A 満仲 ▼ 節付皆無。
7 A 水無瀬 ● 節付皆無。
A 稲船 ● 節付皆無。
[60] D 富士山 ● 節付は役名・小段・へのみ。直しナシ。
8 A 太刀堀 ▲ (下間本)
A 舞車 ▼ 節付皆無。
[61] A 岡崎 ▼
10 A 武文 ● 直し僅少。
A 磯屋 ● 直しナシ。
[62] D 鷺 ●
14 A 正義世守 ● くるアリ。直しナシ。
A 女沙汰 ● 直しナシ。
[63] A 楯尾 ● くるアリ。
23 A 小林 ▼ 節付皆無。
A 貞任 ● 節付皆無。

- [64] A 露 (かなり遠い曲)
- 41 A 礎 直し詳細。
- A 濡衣 ● くるアリ。
- [65] A 摂待 ▲(野上本) くるアリ。
- 24 A 刀 ● 節付皆無。
- D 飛鳥(≡飛鳥寺) ● 直し僅少。
- [66] D 東岸居士 ヲカシのセリフやシテ登場の一声後のサシ・上げ哥を記載。男舞も羯鼓も「舞」とする。
- 25 D 三咲(≡三笑) ●
- A 慈童(≡彭祖仙人) ● くるアリ。
- [67] A 伏木曾我 ◎(菊屋本) 次第の地取の分を「同下」の役名で反復記載。分野・愛藪アリサマ なつかしなど難字多し。
- 28 A 禅師曾我 ▼
- A 調伏曾我 ◎(菊屋本) くるアリ。
- [68] D 春永
- 30 A 長谷六代(泊瀬六代) ● 長大な曲舞謡で、上掛りの揃い本にもこの曲を含む例がある。
- A 葱(≡現在信夫) ● くるアリ。
- [69] A 佐々木 ● くるアリ。
- 33 A 植田 ● 直しナシ。
- A 横山 ▲(下間本) 直し詳細。

- [70] A 七夕 ▼ 節付皆無。
- 36 A 濱川 ▼ 直し詳細。
- A 三山 ▼ くるアリ。
- [71] A 守屋太子 ● 観世文庫本とはかなり文句異なる。
- 38 A 内府 ▼ くるアリ。
- A 俊寛 ▼
- [72] A 文覚 ●
- 46 A 斎藤五 ● 直しナシ。演出注記多様。
- D 巖狸々 ▼ 道行と待謡の中間の詞章なし。完曲《駒形狸々》を半能にした形。
- [73] A 行家 ◎ (古活字本) 直しナシ。
- 48 A 清重 ◎ (菊屋本)
- A 錦戸 ◎ (菊屋本) くるアリ。
- [74] A 花矢倉 ▼ 節付皆無。
- 49 A 塩冶判官 ● 節付皆無。
- A 光季 ● 節付は役名と「しほる」数例のみ。直しナシ。
- [75] D 龍田 くるアリ。
- 18 D 庭鳥龍田(鶏龍田) くる5アリ。
- D 橋姫(住吉橋姫) ▼ くるアリ。

[76] A 藍染川 (菊屋本) クセの後に「安養止」の文句をまず書き、「祝言ノナキ時ハ此キリニテ置也 又祝

39 言ヲ謡時ハ是不謡」と注記し、一行空けて常の文句を併記。

A 兼元 ● 「又熊野詣トモ」と内題下に注記。クセ「一生は風の前の雲…」の曲舞のある形の本文。

祈禱前に「爰ニテして入」と注記。シテの父親が護法善神をも演じる演出であろう。

D 現在鶴 ▲ (高安本)

[77] D 国栖 くるアリ。直しに「羽」「宮」アリ。

29 D 玄上 ● 冒頭の次第が「ひわの塩ち」と誤った形で始まる。

A 草剣(草薙) ● 節付皆無。

[78] A 隠岐院 ▼ くるアリ。曲舞は次第からの全文。

45 A 先帝 ▼ 節付皆無。

A 碇潜(碇襲) くるアリ。直し僅少。

[79] A 菅丞相 ▼

51 A 雷電 ●

A 啼不動 ● 節付皆無。

[80] A 松山鏡 くるアリ。「父は涙にかきくれてや」の上欄に「葵上・小袖曾我・松山鏡」の「や」の比較を

59 注記。

A 酒天童子(大江山) ▼ くるアリ。

D 飛雲 ▼ くる4アリ。直しナシ。

〔81〕A 降魔 ● 「雷声ニテ三人女出ル」「相ノ物ニザウメゴヤウ此四ハン出ヘシシ、モ出ル也」と注記。

13 A 生贄 ▼

A おろち ● 節付皆無。

〔* || 51番。 A || 130番。 B || 6番。 C || 7番。 D || 49番。〕

〔● || 57番。 ◎ || 15番。 ▼ || 33番。 ▲ || 10番。〕

なお、《竜大本》は別稿「車屋謡本」曲名一覧表に全曲を挙げてはならず、曲数が多いため右の「曲目一覧」に基づいて有無を確認することも容易でないので、以下に、右の冊順番号を添えて五十音順に曲名を列記しておく。整版本を示す*印と、紛らわしい曲名への注記も添えておく。

- 愛寿57。藍染川76。阿濃42。朝顔51。あしかり35。飛鳥(飛鳥寺)65。安宅40。敦盛18。綾之鼓50。*蟻通14。淡路21。碇潜78。生田敦盛18。生贄81。磯屋61。一角仙人46。稻船59。巖狸々72。岩船36。植田69。*鶉飼16。*浮船6。雨月25。右近25。歌占36。空蟬51。*烏頭13。*采女3。*鶉鷗羽(鶉羽)11。鶉祭20。梅之枝(梅枝)30。浦嶋25。雲林院19。*江口5。箆28。繪馬21。塩冶判官74。鸚鵡小町29。大社21。岡崎61。隠岐院78。*小塩19。落葉(陀羅尼落葉)51。*姨捨15。*女郎花14。おろち81。女沙汰62。
- *杜若7。花月31。*柏崎9。*春日龍神16。*葛城10。刀65。兼元76。冠56。*通小町8。荳萱37。菅丞相79。*邯鄲10。咸陽宮43。祇王54。木曾57。碓64。木引善光寺58。清重73。清経26。*金札1。草剣(草薙)77。国栖77。鞍馬天狗44。*呉服16。現在鶴76。現在経政28。*源氏供養6。玄上77。源大夫22。元服曾我38。碁52。恋之重荷50。項羽26。皇帝43。降魔81。高野物狂39。護應(護法)46。小鍛冶58。小袖曾我38。胡蝶56。小林63。

- *西行桜10。斎藤五72。佐保山22。逆鉾48。鷺62。桜川30。狭衣55。佐々木69。貞任63。*真盛2。三咲(三笑)66。
 志賀23。志賀忠度27。七騎落40。慈童(彭祖仙人)66。自然居士44。葱(現在信夫)68。舍利46。酒天童子(大江山)80。春
 永68。俊寛71。俊成忠度27。鐘馗45。正義世守62。*昭君14。正尊34。白鬚17。隅田川30。住吉詣52。西王母24。是
 害44。*関寺小町8。殺生石47。撰待65。蟬丸41。禅師曾我67。*千手4。先帝78。雙紙洗52。*率都婆小町8。
 太山府君49。内府71。大佛供養35。*当麻11。竹雪32。武文61。*忠度2。太刀堀60。龍田75。楯尾63。七夕70。
 *玉鬘6。玉井22。丹後物狂39。檀風35。竹生嶋45。調伏曾我67。鼓瀧19。土蜘蛛47。土車29。経正28。露64。*定家
 4。*天鼓12。東岸居士66。東方朔24。道明寺24。*融15。木賊37。知章27。*朝長2。虎送53。
 啼不動79。*錦木12。錦戸73。庭鳥龍田75。*鶴12。濡衣64。寢覚50。*野宮3。野守45。
 橋姫(住吉橋姫)75。橋弁慶34。半部夕顔53。*芭蕉3。長谷六代68。初雪39。花軍57。花筐32。花矢倉74。濱川70。
 反魂香55。班女31。飛雲80。檜垣29。常陸帯53。羊56。雲雀山33。豊干42。伏木曾我67。富士山60。富士太鼓31。
 *藤渡13。伏見48。*二人静7。*船橋13。舟弁慶40。*放生河17。佛原33。
 舞車60。卷衣55。*松風村雨5。松尾23。松虫37。松山鏡80。松浦鏡49。摩無野原(真名井原)58。満仲59。*三井
 寺9。*通盛18。光季74。三山70。水無瀬59。御裳濯20。*三輪11。六浦42。室君32。和布刈23。盲景清41。求塚33。
 盛久36。守屋太子71。文覚72。
 野干47。*矢卓鴨(賀茂)1。*山婆15。*夕顔9。幽霊熊坂34。行家73。遊行柳17。*弓八幡1。*湯屋5。*楊
 貴妃4。夜討曾我38。養老20。横山69。吉野48。芳野閑54。頼政26。透逃子(弱法師)41。
 雷電79。吕后43。輪蔵49。籠祇王54。*籠太鼓7。

〔五)曲目をめぐって〕

右の「曲目一覧」を通覧して気づくことの一つは、脇能だけ、修羅物だけ、源氏種の女能だけ、曾我物だけ、女神物だけ、楽を舞う能だけなどの形に、同種の曲三番をまとめてある冊が多く、二番だけが同種の冊を加えれば大半に及ぶ。もともとが一番綴の整版車屋謡本の分もそうであるから、整版本に、それに数倍する番数の写本を加えて、全体を三番綴にまとめるに際して、かなりの編集意識が働いていると認められる。書風の異なる曲が一冊中に混在する例が二十九冊もある(整版本・写本混綴の冊を含む)から、写本も一番綴の形に書写し、それを適宜に組み合わせて三番綴に仕立てたものと推定される。そうした中で、二冊(26-44)がB書風だけ、一冊(31)がC書風だけでまとまっている事実は、両書風共に番数が少ない(B書風は右の二冊六番のみ)だけに目に立ち、本書の成立過程と書風との間になんらかの関係があることを思わせるものの、明確な意義づけは困難なようである。

かなりの編集意識を働かせて編んだ本と思われる、番数が多いのであるから、当時しきりに謡われたはずの著名曲―近い曲―はほとんど網羅されていていいはずなのに、本書には意外にそれが欠けている。これは元来はもっと多数冊で多数曲だったのに一部が散佚してしまったためのもので、本書の内部にそれを示す明証がある。

まず、「1」の冊に挿入されている紙片甲に「道成寺／葵上／黒塚／欠一」とあり、かつてはその三番綴一冊が存在したことが知られる。また「20」の冊に挿入された紙片乙には三番ずつ六行に計十八番の曲名が列記されており、他の五行分はいずれも本書の三番綴五冊分(54・30・9・32・31)の曲名なので、残る一行(五行目)の「小督・百萬・羽衣」もかつては三番綴の形で本書に存在したものと推測される。「道成寺・葵上・黒塚」「小督・百萬・羽衣」の六番とともに整版車屋謡本の存在する曲であり、整版本がまとめられている他冊の現状から推して、右の六番も整版本だけの三番綴だった蓋然性が高からうから、もとは整版車屋謡本が少なくとも五十七番含まれていたものと思われる。ま

た、存在が知られている整版車屋謡本全七十一番から右の五十七番を除いた十四番(相生・海人・井筒・老松・兼平・小督・自然居士・誓願寺・龍田・難波・軒端梅・白楽天・八嶋・養老)の内の、傍線の(自然居士・龍田・養老)を除く一番までが本書の写本に含まれていない。それらの曲の整版本がもとは本書に含まれていたために写本を追加しなかったと考えられるから、その整版本十一番も後に散佚した可能性が強いであろう。写本にも散佚した冊があるところを勘案すれば、本書の原形は百冊三百番に近かったものと推定される。二百番以上を集めた謡本の中に(大原御幸・鉄輪・狸々・張良・唐船・箱崎・鉢木・放下僧・紅葉狩)などが含まれていないのはすこぶる不自然であるから、原形がもっと多数冊だったことは疑いあるまい。

資料ル《竜大本》は車屋謡本系諸本の中で最も番数の多い本である。それだけに、他の車屋謡本系諸本に含まれない珍曲を多数含むことが大きな特色で、「車屋謡本」曲名一覽表」に曲名を挙げていない曲(前掲「曲目一覽」の●印の曲)が五十七番もあり、車屋謡本と認めた諸本には含まれていない○印十五番を加えれば七十二番に及ぶ。それらが車屋謡本系の詞章か否かについては後に考察するが、系統はともあれ、《竜大本》が江戸初期以前のまとまった謡本の中でも遠い曲を多く含む点では屈指の存在であることは確かである。精査はしていないが、本書所収の詞章が現存謡本の中で最も古い内容を伝えている曲も、かなりあるものと推測される。

〔六〕詞章面の特色——車屋謡本との関係——

全体としての《竜大本》が車屋謡本と密接な関係を持つ本であることは、整版車屋謡本と合綴した本である一事からだけでも知られるが、写本の分の詞章比較からも多くの曲についてそれが確認される。例えば(安宅)は、初めて車屋謡本の詞章の特質に言及した野上豊一郎博士の論考「謡曲原典批判の一例」(同氏著『能の再生』所収)が詳細に他本と

の相違を考察された曲であるが、同稿に引用されている《野上本》(資料メ)の文句と「40」の同曲とはすべて一致する。また「32」の《花筐》の末尾は、常の詞章の後に「又きり」と注して安閑止(女御止)の詞章を併記しているが、これは「又きり」と注する《下間本》《吉川小本》や「昔のキリ」と注する《毛利本》と同じ形の併記である。《吉川小本》の同曲に多い貼紙や書き入れによる修正がすべて踏襲されている点も《毛利本》と同じである。「48」の《吉野》の前シテ登場のサシ謡の後に、「下ゲ哥・上ゲ哥」と続く形を先に書き、「又此諷かへてもうたふ」と注して別文句の上ゲ哥だけの形を併記しているのは、同曲が重複書写されている《吉川小本》の⑨の冊分と一致し、同書⑧の冊分の貼紙による加筆分を表に出した形であり、両方を注なしで併記する《下間本》も同類と言えよう。

また「26」の《頼政》は、後シテの名乗りグリ「今は何をか包むべき……仏果を得んぞ有り難き」(《吉川小本》はそれを抹消)を欠き、クセ後の語りの冒頭は「かくて源平宇治川の南北の岸にうち出たりしに。橋はひいたり水は高し。さすが難儀の大河なれハ……」とある簡略な形で、そこに後人が貼紙で書き添えた「筒井の浄妙一来法師」云々の後年の下掛り諸流の文句とは著しく異なる。ここは実は古今諸流の《頼政》の詞章に変動が多く、その本の系統を判定するキーポイントとなる所なのであるが、《吉川小本・毛利本・吉川大本・野上本・田中東大本》(資料ハ・ヒ・フ・メ・モ)のすべてが《竜大本》と同じ簡略な詞章であり、しかも車屋謡本系以外には見られない形なのである。

くどくなるが、金春禅鳳作の夢想の能五番の内らしい《生田敦盛》と《初雪》にも言及しておこう。「18」の《生田敦盛》の内題下には「禅鳳夢想五番之内」と注記がある。これは《吉川小本》の《黒川》の内題下の注記「夢想之能五番之内」と同類で、特定の五番の謡曲を夢想に基づいて金春禅鳳が作ったとする説が室町末期に伝承されていたことの投影である。般若窟文庫蔵の卷子本謡本「初雪」の奥書に「此能禅鳳之夢中／之五番之内也／かやうに委敷子細殊に／狂言之いひ事などを／仕候ことハ一句他方ニ／□るましく候おさあひ人／の御ためと承候間くハしく／しるし候て進之候

御稽古／□□後可被投火中候／かしく／□文三年六月廿三日／□□大夫殿まいる」とある(上端部虫損)から、天文三年(□文)は「天文」以外は考えられまい)段階にはすでに存在した説であり、(生田敦盛もそれに含まれることが知られる。後代の伝承(元禄頃編の「大蔵作者付」)を参照すると、(生田敦盛・黒川・初雪)以外の二番は(六浦)と(涿漉)らしい。その五番の内たる「39」の(初雪)は、内題下に「岌蓮始テ能ノ為禪鳳作いひたて也」と注し、冒頭のアイのセリフに「狂言の女青柳いひたて」と肩書している。一方、江島本52頁の記事によれば、資料へ(高安本)の(初雪)は、貼紙に道晰の筆跡で「岌蓮始テ能ノ為禪鳳作」とあり、続けてアイのセリフをも記載しているという。それに基づいて江島氏は、金春禪鳳が孫の岌蓮(金春大夫喜勝)の初舞台のために(初雪)を新作したことを想定しておられるのであるが、(高安本)や(竜大本)の注記の説の根源が前述の般若窟文庫蔵謡本の奥書ではなからうか。この奥書は、既存の能(初雪)を「おさあひ人」(幼児・少年)が演じる際の台本としてアイのセリフまで記載した丁寧な内容の謡本を誰かが書写し、少年の父親たる「□□大夫」に「□文三年」に贈ったことを語る内容であるが、書写したのが禪鳳自身で、贈られたのは禪鳳の子の金春大夫七郎氏昭、「おさあひ人」は氏昭の子の八郎喜勝(法名が岌蓮)であるとの解釈を生んでもおかしくない内容である。そうした誤解に基づいて岌蓮のために禪鳳が(初雪)を新作したとの伝承が生れたのではなからうか。が、喜勝(岌蓮)は天正十一年(一五三三)没で、享年は74歳説(『金春氏政系図』)が正しいと認められるから、生れは永正七年(一五〇〇)で、天文三年(一五三四)には数え25歳になっていた。「おさあひ人」などと呼ばれるはずはない。むしろ考えられるのは、喜勝の早世した長男(『四座役者目録』の小禪鳳?)が天文三年当時初舞台を踏む年齢に達して、祖父の七郎氏昭が孫のために謡本を書写して子の金春大夫喜勝(岌蓮)に贈ったケースであろう。また、『竜大本』の注記が、岌蓮のために禪鳳が作ったのは「いひたて」(アイのセリフ)だけと解し得る形である点にも注意を要しよう。禪鳳とか岌蓮とか言うのは誤りにしても、「おさあひ」のために書写した般若窟文庫本(初雪)の段階で初めて

アイのセリフが謡本に書き込まれた可能性はかなり強いと思われるからである。現に、般若窟文庫蔵の金春七郎(氏昭)節付の別の卷子本「初雪」(荒木実勝奥書本)にはアイセリフが記載されていない。江島本が紹介する《高安本》の注記に「いひたて也」がないのは、江島氏が省略したためかも知れない。その《高安本》が貼紙で追記したアイのセリフを本文として最初から書いているのが《竜大本》の《初雪》であり、《竜大本》の詞章が車屋謡本系であることの一証ともなる。そのアイセリフが般若窟文庫本と同じか否かを確かめたいところであるが、般若窟文庫本が首部を欠き、末尾の「なりて候」だけしかアイセリフが残っていないのが残念である。なお、現存車屋謡本で唯一《初雪》を含む《吉川小本》は、内題下に「狂言の女青柳しかく」(《竜大本》の肩書注記に近い)と記すだけで、本文にはアイのセリフを記載していない。アイが「青柳」なる特定の名を名乗るのも、新作能ゆえの異例であろう。

右に列挙したような顕著な事例からだけでも、《竜大本》の詞章が車屋謡本系であることは明瞭であろうが、車屋謡本の内部でも曲によっては詞章に変動があった。どの車屋謡本に近いかも見ておかねばなるまい。

《経政》のワキ名乗りに《睡道本》と《下間本》の両様の形があることは第二章一の《睡道本》についての考察の中で言及した。そこが、「28」の《経正》では《下間本》型——《吉川小本》や《毛利本》と同じく名乗りに続いて平家一門滅亡にまず言及する形——で、すぐ経正のことを言う《睡道本》や《吉川大本》の形とは違っている。また第二章八の《吉川大本》の考察で三本の文句を a b c d の四ヶ所について引用・比較した《角田川》の場合、「30」所収の同曲は、「a 冒頭のワキの名ノリ」は《吉川小本》と全く同文であるが、「b シテ到着後のワキとの問答」は前半が《元安本》(能楽研究所蔵の金春元安自筆本)とほぼ同文なのに後半は《吉川小本》とほぼ同文であり、「c 船中でのワキと商人の問答」は《吉川大本》《元安本》とほぼ同文で《吉川小本》とは異なり、「d ワキの語り」は《吉川小本》と同文に近いが「わか名ハ梅若丸生年十二歳になり候」の一句を含む点と語り出しは《元安本》に近いという複雑な関係にある。車屋謡本内部でのこうした《角

田川〕の文句の変動が《吉川小本》以後に《元安本》と同系の本を入手した鳥養道晰が意識的に改訂したためであろうことを、第二章八に述べた(『能楽研究』19号41頁前後)。総じて《吉川小本》に近いが《元安本》の影響も認められる《竜大本》の《隅田川》も、その改訂の一過程を示しているであろう。また、「66」の《東岸居士》はシテ登場の一セイの後にサシ・上ゲ哥(観世流の小書「橋立」の文句と同じ)を記載しているが、同曲を含む車屋謡本四種を見ると、《毛利本》《吉川大本》は一セイだけの形、《野上本》《田中東大本》はサシ・上ゲ哥のある形である。だが、《竜大本》が記載するワキと狂言の問答は四本のいずれにも見えず、省略されている。《竜大本》が最も丁寧な形の詞章を持っていることになる。もう一つ、「44」の《盲景清》は、内題の下に次第の地取りの詞章を注記しているが、《吉川小本》も同様である。同曲を含む他本は、《下間本》と《吉川大本》は注記もせず本文でも反復しない形、《野上本》は本文中に「下」と注して同文を反復記載している。《景清》の場合は地取りの文句まで書く《野上本》が最も丁寧な形なのである。

以上の四曲の比較だけで、《竜大本》の詞章が車屋謡本のどの種の本に最も近いかを認定することは困難であろう。年記の新しい本がかえって古い内容の本文を伝えていることがある上に、同じ一群の本でも曲ごとの書写年時が一定していない——《吉川小本》などは数十年にわたっている——などの事情のため、車屋謡本諸本の前後関係が必ずしも明確ではないし、二百番を越す《竜大本》の全曲が同じ性質とも考え難いからである。だが、《東岸居士》や《景清》の事例は、《竜大本》が車屋謡本の中でもかなり後年の本により親近性が強いことを思わせる。鳥養道晰が謡本節付に熱心に関与した時期としては晩年に属する慶長になってからの本の影響下にあるのではなからうか。

(七) 遠い曲に見る《吉川小本》との関係

右に《竜大本》の詞章が車屋謡本系であることを、諸本に含まれている比較的近い曲主体に幾つかの例を挙げて見て

みたが、おのずから《吉川小本》との関係に言及することが多かった。同本に鳥養道晰自身による本文改訂がすこぶ多く、それがどの程度継承されているかを見ることによって、同本との親密度や前後関係が把握できるからであるが、重なり合う曲の大半は《吉川小本》の改訂が《竜大本》に継承されているもの、前述の《経正》のような例外もあり、多数曲を一括した揃本の性質が必ずしも一様ではないことをあらためて思い知らされる。《景清》のように、《竜大本》が《吉川小本》と密接な関係にあることを思わせる例もあり、総じて《竜大本》は《吉川小本》と縁が深そうだと印象を強く受けはするが、《吉川小本》の改訂本文の継承は同本より後の書写らしい《毛利本》《野上本》などにも顕著な現象で、《竜大本》がそれらの本の影響下にあっても生じ得る。広く諸本と比較してからでなければどの本と特に縁が深いとは言えないのである。《竜大本》の曲数が多い上に比較すべき他本の種類が多いことが重なって、近い曲については全般的調査を果たさないままであるのが実情である。

その点、《竜大本》所収曲の内、車屋謡本では《吉川小本》だけにしか同じ曲が含まれていないほどの遠い曲の場合には、おのずと《吉川小本》と比較せざるを得ないことになる。その遠い曲——「(四)曲目一覧」で▼印を添えた曲——が三十三番もあった。鳥養道晰が遠い曲の蒐集に努め、それを《吉川小本》に集めてあったためである。その遠い曲の両本比較の作業を通して、遠い曲では《竜大本》と《吉川小本》がすこぶる密接な関係にあることを確認できた。幾つかの曲について以下に例示するが、例えば「72」の《巖狸々》がワキの道行からすぐ待謡に飛ぶ詞章で、完曲《駒形狸々》の半能の形であり、《吉川小本》の同曲もそれと全く同じであるなどの内容面の一致は、ほぼ全曲にわたることなので一々指摘せず、やや特異な面を持つ4曲についてのみ言及することにする。

《竜大本》「49」の《松浦鏡》は、観世文庫に現存する世阿弥自筆本『松浦』とほとんど同文である。これは《吉川小本》の同曲がそうなのを継承したもので、《竜大本》が《吉川小本》に基づいていることは文字遣いの共通や直しの一致から

も確實である。世阿弥本に誤写があるらしい「マツラノハカセ」を「松浦の川瀬」とする改変も共通する。遠い曲を多く含む《吉川小本》の底本に金春流以外の別系の本も多数採用され、親交のあった公家の山科言経などを通して観世大夫系の本をも道晰が書写していることについては、《吉川小本》の考察で言及した(『能楽研究』14号88～96頁)が、『世阿弥自筆能本集』(表章監修・月曜会編。平成九年四月、岩波書店)が刊行されて対比が容易になった今、改めて世阿弥本と《吉川小本》の《松浦鏡》とを比較してみると、道晰が参照した本が世阿弥本にすこぶる近いことが確認できる。漢字の当て方がかなり正確な点などからは、山科言経が観世大夫から世阿弥本を借覧して漢字を当てながら転写し、それを道晰がまた転写したケースなどが想定される。「山の上の憶良」に「ヲグラ」と濁点付きの振仮名を添えてあるのも世阿弥本の濁点を生かした形である。その道晰本(《吉川小本》)から数転を経たであろう《竜大本》ではさすがに若干の誤写があり、右の振仮名も省略されているが、かなり忠実な転写本ではある。

「50」の《寢覚》は《吉川小本》に多い削除上書の形の訂正がほとんどすべて踏襲されている。そのこと自体は特筆するほどのことではあるまいが、より注目されるのは《竜大本》に3例現れる「くる」が《吉川小本》と同じ位置に施されていることである。道晰自身が節付した同曲の間で「くる」の使用場所が一致している例はさほど多くない。そのことが「くる」の用法の曖昧さを象徴しているほどである。それなのに3例が一致するのは、転写に際して底本の節付を忠実に移した結果であろうから、直接の転写ではないにしても、《竜大本》が《吉川小本》に基づいている可能性はかなり強いと言えるであろう。

「55」の《狭衣》の内題下には「吟ツヨク 逍遙院 御作」と注記があるが、これは《吉川小本》の同曲がやはり内題下に「強 逍遙院殿御作」と注記しているのに基づくに相違あるまい。《狭衣》の能が逍遙院三条西実隆の作であることは、当人が『実隆公記』に明記しており、文龜三年(一五三)に観世によって演じられてもいる。写本の謡本には稀なこ

の種の注記は、観世文庫蔵の室町末期書写の本に稀に見られる。曲の素性からも《吉川小本》の底本は観世系の本だつたろうと推測され、詞章・文字遣いの比較からも《竜大本》は《吉川小本》に基づいていると信じられる。その作者注記よりもっと興味深いのは《竜大本》の「吟ツヨク」なる指定である。これは《吉川小本》では単に「強」なのを吟の強弱に関する注記と解して言い替えた形に違いないが、そう言い替えていいか否かは問題であろう。吟の強弱の分離が文献で明白に確認できるのは江戸初期以降であり、もし《吉川小本》の「強」が道晰自身による加筆で吟のことならば、吟の強弱に関する飛び離れて早い用例になるからである。《竜大本》の他曲の直しに例のある「息ツヨク」の意であること(それが強吟の原形ではある)や、道晰の加筆ではないケース(墨色からはその可能性も大きい)も想定してみる必要がある。ただし、道晰時代に吟の強弱の別が確立していなかったと断定はできず、《吉川小本》の「強」を《竜大本》が「吟ツヨク」と解したのが正しいこともあり得る。なお他の用例を探索せねばなるまい。いずれにせよ、《狭衣》の内題下の注記の共有は、《竜大本》が《吉川小本》と密接な関係を持つてゐることの明証の一つとしてよからう。

「57」の《木曾》は、願書を書けと命じられた覚明の返答のセリフの所が「おかしへ畏て候。聽而つかまつらふするにて候」とある。今の観世流ではシテの覚明の役名を「おかし」(＝アイ)とするのは不審で、その場面以前に埴生八幡の教え手として別に「ヲカシ」が登場しているのに引きずられた誤写であろうと考えていたところ、《吉川小本》の同曲が全く同じ形であった。教え手のアイを「ヲカシ」、覚明の役名分を「おかし」とする片仮名・平仮名の使い分けまで一致し、詞章はもとより同文、文字遣いもすこぶる近く、1例のみの「くる」の位置も同じく、「打返」などの書き入れや振仮名・直しまでほとんどが共通し(直しは《竜大本》に増補がある)、《竜大本》は《吉川小本》を直接の底本として書写されたと考えてもいいほどである。

以上に考察した4曲ほど顕著ではなくとも、《竜大本》の▼印の大半の曲は《吉川小本》と密接な縁を持っているが、

すべてがそうとは言えない。例えば「80」の〈飛雲〉は全体にわたって車屋謡本風の節付があるが、《吉川小本》の同曲は役名やハ印があるだけでゴマ点の類は皆無である。文句にも転写関係を想定しにくい小異がかなりある。同じ「80」の〈酒天童子(大江山)〉にも車屋謡本風の節付があるが、《吉川小本》では「一児二山王…」の一謡にだけゴマ点の類があるのを除けば役名とハ印だけの不完全な節付である。しかも文句にも少なからぬ出入があつて、同系統の本文とも言い兼ねるほどである。《吉川小本》の影響下にはない曲も《竜大本》には含まれていることは、遠い曲に於いても近い曲の場合と同様らしいのである。直接の転写関係を想定したいほど密接な関係を持つ曲が多い一方で〈飛雲〉や〈酒天童子〉のような例外をも含む事実を、どう理解すべきなのであろうか。

〔八〕《竜大本》についてのまとめ

右に《竜大本》の〈飛雲〉や〈酒天童子〉が《吉川小本》の同曲と相違があることを述べたが、《吉川小本》と違うからと言つて車屋謡本系ではないと断定することはできない。確実な車屋謡本の内部においてすら同曲の詞章に大きな出入がある例は少なからずある。鳥養道晰が意識的に詞章を改訂していたことも《吉川小本》の実態などから明らかである。それらのことに、《竜大本》のような多数曲を集成した本は多種類の底本に依拠しているのが普通であることを重ね合わせる、節付不完全な《吉川小本》の形を補訂・改訂した別の車屋謡本があつて、《竜大本》の両曲はそれに依拠したのではないかとも考えられよう。御都合主義とも評されそうなそんな推測をあえてするのは、それなりの理由があつてのことである。

《竜大本》の〈飛雲〉の節付には「くる」が4例も見られ、その用法——3例までが祈りの所に集中している——も鳥養道晰のそれと全く同じく、節付は確実に車屋謡本系である。《吉川小本》とは小異があるとした本文も、例えば寛文

頃の刊行と江島伊兵衛氏が推定された下掛り最初の外組謡本(五番綴の小型本で全二十冊百番)の〈飛雲〉などと比較してみると、それらは両本とは全然別系統で、両本の文句が同系と言える近い関係であることが知られる。《竜大本》にかなり誤写がある——明王への祈りの文句が東方・南方・西方・中央・北方の順なものもそうであろう——ことが、一見、《吉川小本》とは別系かを疑わせたのであった。また〈酒天童子〉の場合は、文句は確かに出入が多いが、これも下掛り版本を加えて考察すると、《吉川小本》↓《竜大本》↓版本の形に推移していることが明白で、《吉川小本》から版本への文句変動の中間の様相を示しているのが《竜大本》なのである。それを同系と認めるのは無理であろうが、より顕著なのが節付の直しの一致である。《吉川小本》の〈酒天童子〉は前述したように「二児二山王」の上ゲ哥の所にだけ節付があるが、そこに「下・上・下・ハル・上・下・中・上・下・上・下・中・入」の13個の直しが書き込まれている(上中下はみな一音についての指定)。その内の傍線の4例は《竜大本》でも同じ文字に同じ直しが添えられているのである。13例中4例しか一致しないものの、本来の節付とは別種の補助的な加筆であることが明瞭で転写の間に省略されやすく、共に車屋本系直しを持つ確実な車屋謡本の同曲においてすら重なる度合が高くないのであるから、4例の一致はすこぶる重視されるべき現象であり、《竜大本》の〈酒天童子〉の節付が車屋謡本系で、鳥養道晰の節付とどこかでつながっていることを物語っていると解される。そうしたことのため、《竜大本》の両曲が、《吉川小本》とは別の、しかし同系の車屋謡本に基づくことを想定したのである。

車屋謡本系の節付の特色が「くる」の使用と独特の直しの加筆であることは、これまでにしばしば言及してきた。〈飛雲〉では「くる」の使用を、〈酒天童子〉では直しの様相を、車屋謡本系であろうこと理由にしたのもその線に沿っている。そうした見地に立って改めて想起されるのが、第三項で指摘したように、《竜大本》の全二四三番中の二〇二番に車屋本系直しがあり、他の車屋謡本に含まれない遠い曲(四の●印)でも十五番に「くる」が使用されている

事実である。その二つの象徴的な現象からだけでも、《竜大本》が車屋謡本系の本であることが察知されたが、これまでに具体的に言及した諸曲のいずれもが、そのことを裏付けている。観世次郎権守信光や観世弥次郎長俊の作品など、源をたどれば観世流謡本にたどりつく曲(《吉川小本》に基づく稀曲など)も含まれていようが、節付なしの曲以外は下掛り節付で統一されている《竜大本》を車屋謡本系と位置づけることは、総括的な把握としては許容されて然るべきことであろう。そうした大まかな評価だけで《竜大本》の考察を終えるのが、本稿を書き始めた段階での予定であった。

だが、書き進める段階で必要を感じて《吉川小本》などの他の車屋謡本と子細に比較する作業に深入りしているうちに漸次強まってきたのが、《竜大本》の全体が直接または間接に鳥養道晰およびその後継者の所持していた本に基づいているのではないかとの考え方である。後章で考察する古活字車屋本や偽車屋本やその覆刻本(『七大夫仕舞付』など)も車屋謡本系であり、「車屋謡本系」と言うだけでは範囲が広すぎる。その中でも《竜大本》は「鳥養道晰系」とでも呼ぶべき本流の系統ではないかとの推測である。比較・調査したほとんどすべての曲がそれを思わせる詞章を有したことが主因ではあるが、《竜大本》が本願寺伝来本(明証はないがそう見なすのが自然であろう)で、本願寺は車屋謡本の集積していた場であるとの状況認識も、右の推測を強めた背景である。現存する車屋謡本関係資料で竜谷大学図書館所蔵(《本願寺伝来》)なのは、資料ニ《古歌謡集》と資料ヌ《小謡色紙》と資料ラ《竜大本》の三種だけであるが、資料タ《暁道本》は本願寺末の願泉寺伝来本であった。もと本願寺にあった可能性の強い本なのである。資料ナ《下間本》は下間少進家に伝わった本である。広義の本願寺伝来本に数えていいであろう。資料ヘ《高安本》も「西本願寺伝来であるとのことである」と江島本に言う。所蔵者高安六郎氏の談話に相違なく、氏は本願寺と縁の深い人だったから、信じ得る発言である。しかもその《高安本》は、江島氏調査の十八冊九十一番が一揃いなのではなく、不完全な二種の本が混在し、一種は遠い曲を多く含み、共に原形はもっと多数冊だったと推測される本である(第二章九『能楽研究』19号46頁

以下参照)。そうした諸本が《竜大本》が書写された当時に本願寺にまともな形で伝存したことも考えられるし、少なくともそれらを依拠資料として利用することは本願寺において可能だったはずである。そうした背景がある上に、調査した各曲のほとんどに《吉川小本》などの他の車屋謡本と密接な関係があることを示す各種の一致点があるのであるから、《竜大本》の全体を鳥養道晰系と考えたくなるのも無理はあるまい。

さらに言えば、鳥養道晰や息子の鳥養新蔵の所持していた本の大半が本願寺に移管されていてそれが《竜大本》編纂に参照されたとか、道晰父子または後継者が《竜大本》の編纂に関与したとかの事態も想像していいように思われる。《竜大本》の大きな特色が遠い曲を多数含むことで、「(四)曲目一覧」の●◎▼▲印の分を合わせれば一一五番にも及ぶ。そうした曲は遠い曲の蒐集に熱心だった道晰父子の手元の本にこそ集積されていたろうものの、他人に依頼されて節付を施した百番程度の揃い本にそう多数は含めにくい曲である。《竜大本》所収曲で確実な道晰手沢本たる《吉川小本》にのみ存する曲が三十三番にも及ぶことがそれを物語っている。その遠い曲を百番以上も集めているのは、遠い曲を集成してあった道晰なり新蔵なりの所持した本を参照したことの反映なのではあるまいか。もしそうならば、前述の二つのケースが想定されることになる。道晰父子の後継者のことは皆目不明であるし、宗晰時代の彼の手沢本だった《曄道本》が本願寺末の願泉寺に伝わった事実が鳥養家伝来本が本願寺に移管されたことを物語っているから、道晰父子の旧蔵本が本願寺に移って《竜大本》編纂に利用されたケースを想定するのが、より無難であろうか。

ただ、《竜大本》が《吉川小本》またはその特質を継承する本を参照していることは確実なのに、同書が岩国吉川家に伝来し、本願寺に蔵されていた形跡のないことが、右の推測の障害となろう。本願寺に劣らず車屋謡本関係の資料を豊富に伝えてきたのが吉川家である。吉川家を含めた毛利家と本願寺は石山時代から連携していた間柄であるから、車屋謡本関係の諸資料が本願寺を経由して吉川家に移ったことは十分考えられるものの、《吉川小本》についてはそれ

を思わせる徴候が皆無である。慶長二年に毛利家の家臣たる柳沢三左衛門が道晰に謡本節付を依頼したことが資料本《柳沢本》の奥書(『能楽研究』19号51頁)から知られ、道晰が早くから毛利藩と直接的な縁を持っていたと考えられることも、《吉川小本》がもとと吉川家所蔵だったことを思わせる。しかし、《吉川小本》が吉川家に移る以前に、道晰自身や後継者がそれに基づく別本を書写していたことは十分あり得よう。それが《竜大本》編纂に利用されたとすれば、《竜大本》に《吉川小本》の影響が大きいことも説明が可能になる。道晰手沢本を含む一群の鳥養家伝来本が本願寺に移り、それに基づいて《竜大本》が成立した経緯も、十分想定できることであろう。

右に「道晰旧蔵本」と言わずに「鳥養家伝来本」と言ったのは、《竜大本》に息子の鳥養新蔵の節付が強く投影しているとの認識からである。第(三)項に言及したように、《竜大本》の大半に加えられている車屋本系直しは鳥養新蔵所持の《曲舞本》(資料ネ)の直しと酷似している。他の車屋謡本の諸本にも存在する直し以外の、謡い方の細部についての一般語を使用した特色ある指定が同質なのであるから、これは特筆に値する共通点で、もし《曲舞本》への直し書き入りが新蔵自身ならば、《竜大本》の直しも新蔵筆(または新蔵筆の本からの忠実な転写)と考えていいほどの現象なのである。鳥養新蔵が父の謡本などに基づいて《竜大本》を編纂したもので、それが後に本願寺に移ったケースすら想定したいほどである。が、《曲舞本》への直しが新蔵自身による加筆であると現状では断定できない——その点だけに絞って考察すれば断定できるようになると予測してはいる——ので、今はそこまでは言わずにおく。

鳥養新蔵の《竜大本》への関与を疑うもう一つの理由は、新蔵が所持していたことの知られる謡本と《竜大本》との重なるの度合いがかなり高いことである。山科言経と鳥養道晰・新蔵父子とが謡本を貸借して相互の謡本の曲目増加に努めていたことが、『言経卿記』の文禄二年から慶長二年にかけての記事から知られる。言経が貸した相手は道晰のことが多く、それが《吉川小本》にそのまま投影していることは同書の考察の中で述べた(『能楽研究』14号88頁)が、父

とは別に新蔵も言経から謡本を借りている。無論転写したであろう。貸した分は父より多く、貸借ともに遠い曲がほとんどであるから、早い段階(文禄四年)から新蔵が遠い謡曲の蒐集に意を用いていたことが知られる。まず新蔵が言経に貸したことの判明する曲は「マキキヌ・ヤカン・ふしさん・いはほしやうく・カハツ・コノ花・住吉詣・せうきう・吉野閑・韋駄天・隠岐物狂・返魂香」の十二番であり、傍線の八番は《竜大本》に含まれている。また新蔵が言経から借りた本の内の稀曲(節付校合など別の目的のためらしい四番の近い曲を除く)は、「鶏籠田・神有月・太山府君・セツタイ・舞車・ハセ六代・鷺・伏見・富士山・さ衣・アイソメ川・花やぐら・馬あらしい・メカリ・浜ナラシ・佐々木・コオウ」の十七番で、傍線の十三番が《竜大本》に含まれる。貸・借合わせて二十八番(富士山)は貸借両方に重出)の内の二十番が《竜大本》と重なるわけで、71%を越えるこの割合はかなり高いと言えるであろう。鳥養道晰と山科言経との間で貸借・転写された曲が、道晰から言経への分が「イカリカヅキ・ウノマツリ・ハツ雪・露・ヤカン・黒川・河野」の七番、言経から道晰へ貸した分が「クマサカ・サ衣・メカリ・コテウ・玉ノ井・トウエイ・ヒバリ山・絵馬・粉川寺・丹後物狂・コオウ・大社・スゞキ・ヨロホシ・高野物狂・清重・ネサメ・望月・はま川・玄上・ガウマ・源大夫・鶏籠田・三山・ハニフ(木曾)・菅丞相・呂后・冠」の二十八番で、計三十五番(新蔵の分との重複を含み、近い曲は除いた)の77%にあたる二十七曲(傍線分)が《竜大本》と重なるのよりは、新蔵分の数値がやや低いが、鳥養新蔵が《竜大本》の編纂に関与したことを思わせる比率ではある。道晰所持の稀曲をこれほど高い比率で組み入れていることも、新蔵が関係者の一人であれば容易に納得できるし、新蔵所持本が活用されているとすれば、それは新蔵自身かその後継者が関与しているのでなければ生じにくいことのはずである。推測を裏付ける決定的な材料とは言えまいが、道晰の後継者、なかんづく息子の鳥養新蔵が《竜大本》の編纂に関わっていることを思わせる一つの材料ではある。なお、この問題については、次節の《菊屋本》のまとめの記事をも参照されたい。

以上、あれこれと推測説を展開したが、いずれにしても、《竜大本》の全体が車屋謡本系であることは確かであろう。「車屋謡本曲名一覧表」の総曲数二三五番をも越える二四三番が現存し、原形は二百番に近かったと推定される《竜大本》のことゆえ、中には若干の例外もあろうことを含みとしての把握である。散佚した冊があることは惜しまれるものの、車屋謡本系の本の全体的規模を推察させる唯一の伝本が《竜大本》である。車屋謡本そのものではないのに、それに劣らぬ紙数を費やして詳述した所以である。

なお、《竜大本》の中には、次節で紹介する資料リ《菊屋本》と密接な関係を持つ曲も含まれている。そのことについては次節で言及することにした。

3 菊屋家旧蔵五番綴本(資料リ《菊屋本》)

能楽研究所の所蔵本(能研246)で、研究所が発足した昭和27年に他の数点の写本謡本と共に村口書店から購入している。昭和29年刊行の『蔵書目録 附解題』の「二 謡本 下懸り写本之部」に「12 菊屋家旧蔵五番綴謡本」と題して解題を加えた本であるが、まだ謡本調査の経験に乏しかった段階で表章が執筆したこの解題は、後節に言及する資料「9《菊屋別本》には「9 菊屋家旧蔵車屋本系謡本」と題していながら、《菊屋本》には「車屋本系」を添えない名称を与えていることが象徴するように、すこぶる不備が多く、車屋謡本との関係についても誤認が少なくない。比較できる資料がまだ僅かだったことが主因であろう。よって、今の立場から改めて解題を加え、その性質を考察することにする。以下、昔の解題を「旧解題」と呼んでゆく。

〔一〕書誌の大概

綴帖装の半紙本(縦242、横168^ミ)で、五番綴三十冊、計百五十番の揃本。把手の金具・掛蓋付きで仕切りなしの簡素な木箱(少し虫損)に収める。山口県萩市の旧家で毛利藩出入りの豪商として著名な菊屋家の旧蔵本。掛蓋の右上に貼った整理札に「大正十五年改ノ(部)天ノ(門)三ノ(号)一三」とあるのは、同じく菊屋家旧蔵本だった二番綴の資料「2《菊屋別本》の整理札と同種であり、菊屋家時代のものに相違ない。一冊が四帖または三帖仕立てで、綴糸は橙色。菱形地に蔓草模様を研ぎ出した紺色表紙が大半であるが、①の前表紙と④⑬の後表紙とは改装されたもので、紗綾型模様研ぎ出しの厚い濃紺表紙である。④はもとの後表紙裏貼りに続いていたはずの途中の一丁が欠けている。また⑬

は後表紙を欠き、前表紙も剝離し、その裏貼りとそれに続く途中の一丁も失われていて、改装表紙分は保存状態が悪かった時期があるらしい。表紙中央上部に赤色の題簽(縦12、横60ミ)を貼り、上右・上左・中央・下右・下左の順に五番の曲名を書き、それは大半の冊の本文(A書風)と同筆と認められる。料紙は車屋謡本のどれと比較しても遜色のない上質の厚葉斐紙が大半であるが、②⑤～⑩の六冊は赤みを帯びた軟らかい異質の料紙である。各冊の第一紙の裏に五番の曲名を横に列記するのは車屋謡本の多くに見られる扉題と同じ形で、本書が車屋謡本系であることを思わせる材料の一つであるが、それもA書風と同筆と認められる。各冊に本文通読を妨げるほどではないが虫損がある。

各冊第二紙からの本文は片面六行で、曲ごとに丁または面を改めて内題を書く。ただし、⑥の(雲林院)は前曲が丁表(見開き左頁)の1行目で終わり、1行明けて3行目に内題を書いている。前曲が丁の表で終わった場合にその裏を明けて置かずに次の曲を丁裏から書き始めていることが多く、四十四番に及ぶ(後掲「曲目一覽」)の曲名の上に*印を添えた曲)が、②の末三曲は丁裏(見開き右頁)を空白にし、次丁表に内題がある。この冊は書風が他と異なり、筆者によってそうした差異が生じているらしい。丁裏で前曲が余白もなく終わった場合は、次丁表の1行または2行を明けて内題を書いている。書写面の広さは縦205、横140ミ程度で、書風の違う冊もほぼ同様である。

奥書はどの冊にもないが、江戸初期の写本に相違あるまい。旧解題は江戸中期の写本としているが、元禄以後の写本とは思えない由をも述べており、寛文頃までを江戸初期とする立場での記述らしい。そうだとすると江戸中期は下げ過ぎで、後述する内容面の特色からも、欠失したのを後年に(数冊の改装と同時か)補写したことが明白な⑩第三帖以外は寛文以前の写本であることが確実と思われる。寛永までさかのぼる可能性もあろう。

本文の書風は一様でなく、下記の五種の書風に分類される。(A)大半の冊①～⑩、⑩前半、②⑤～⑩)は御家流系統の達筆(写真105～107参照)であるが、鳥養道晰(宗晰)の書風とは異なる。曲数が多いだけに、文字を詰めて書いた所な

青き若くそめめきや
 伊し松風ひきてけり満
 千世松風乃 神をひきて肩
 何れも 松風をひきて肩
 何れも 松風をひきて肩
 何れも 松風をひきて肩
 何れも 松風をひきて肩

(109) C 書風の〈松風〉

白樂天
 舟漕ひてりのかれくたの
 の園とふれん 柳もたの
 木もたのくく白樂天とた我
 事やゆきもしらひひり魚
 園ありとふれん大日本園とた我

(108) B 書風の〈白樂天〉

胸をたのむかきかきかきかき
 をや 野村山月松風く 四林松書
 松風をひきて肩 鬼一
 何れも 松風をひきて肩
 何れも 松風をひきて肩
 何れも 松風をひきて肩
 何れも 松風をひきて肩

(111) E 書風の〈黒塚〉

舟漕ひてりのかれくたの
 の園とふれん 柳もたの
 木もたのくく白樂天とた我
 事やゆきもしらひひり魚
 園ありとふれん大日本園とた我

(110) D 書風の〈頼政〉

どには別筆を疑わせる書風もあるが、まずまずこれらは同筆と認め得るようである。「B」②②の二冊は御家流系ではあるがやや草書がかった丸みある書風で、総じて文字が大きい(写真108)。「C」②③は何流とも言えない草書風のやや乱雑に見える書風で、「さてく」など二音の反復記号を「し」に近く書く点に特色がある(写真109)。「D」②④は御家流系とは言えない硬い書風で、細字・小字が多く、かなり丁寧な書写態度である(写真110)。「E」②④は草書風の点はCに似るが、文字が小さく、さほど乱雑ではない(写真111)。以上五種の書風が冊単位に混在しているが、全冊の扉題がA書風で書かれており、各書風分が時を隔てて書写されたわけではあるまい。全三十冊の二十五冊までがA書風で書かれ、BCDEは合わせて五冊に過ぎないものの、その五冊には近い曲ばかりが収められているから、五冊が補遺といった関係ではなく、当初から分担執筆の方針で編まれた揃い本と思われる。書写態度が書風によって異なり、大半を占めるA書風と一冊だけのE書風が概して丁寧で、他書風が「く」で済ませている冒頭のワキ次第の反復部分も一々書いていることが多い。なお、前半がA書風の①⑨の後半は他と全く異なる拙筆であるが、これは同冊の第三帖が欠脱したのを後に補ったものに相違ないので、書風の一つには加えないでおく。旧解題は二冊だけが異筆であるように言うなど、書風の説明に特に不備が多い。

節付は、①⑨の後半が間拍子入りの後代の節付でそこが後代の補足であることを明示しているのを除けば、本文が別筆の②④④を含めて、すべて同筆と認められる。全百五十番の内の六十番に車屋謡本系統の節付の特色たる「くる」が見られ、また以前に「車屋謡本系直し」と呼んだ細かな節の加筆——上・中・下・中下・当・持・不持・引・入・越・不越・下声・ウハ声・同吟・ハルなど——が四十七番に施されている。本書が車屋謡本系統の本であることはその点からも明瞭であろう。《竜大本》の多くの曲に施されていた一般語による謡い方の指示——ユルリト・カロク・ソノマ、などの類——はほとんど見られないが、①⑦の〈関寺小町〉に「サラリト・少かるく」、②⑨の〈蟻通〉に「ソト・ヨ

ク入」の用例がある。精査すれば他曲にもあるかも知れないが、極めて少ないことは確かである。

〔二〕曲目一覧〕

以下に資料リ《菊屋本》の所収曲を列举する。この曲目一覧は左の凡例にしたがっている。

※冊順は記されていないので適宜に定めた。料紙が厚手斐紙の冊を前、軟質料紙の冊を後に置き、斐紙の冊は書風の別を考慮して順序を定め(A、その他の順)、冊番号①～③④の下に各冊の書風や装幀上の特異点や所収曲の傾向などを記した。

※曲名文字は扉題に従い、外題(題簽の分)や内題の文字が異なる曲については「」内に記した。その「外」は外題、「内」は内題を意味する。曲名上の*印は丁裏から始まる曲である。

※曲名の下には、まず前述の「くる」の有無を「k」の略号、直しの有無を「n」の略号で示した。続いてその曲の遠近の度合を推測する手掛りとして、整版車屋謡本に含まれる曲を「整」の略号で、偽車屋本(後文参照)所収曲を「偽」の略号で示し、さらに各曲が車屋謡本や同系本にどの程度含まれるかを左の記号で示した。ここで言う「車屋謡本」とは本章の前節までに考察した写本の車屋謡本のこと、「同系本」とは本節で考察している五種の本と資料ヨ《田井本》のことである。

◎…三種以上の車屋謡本に含まれる近い曲

○…二種以上の車屋謡本と二種以上の同系本に含まれる曲。

△…二種以上の車屋謡本と一種の同系本に含まれる曲。

▲…車屋謡本の一つ(書名注記)にだけ含まれる曲。

●…車屋謡本ではどの本にも含まれない遠い曲。

●…車屋謡本にも同系本にも含まれない極めて遠い曲。

右の記号とは別に、《竜大本》に写本で含まれる曲を「竜」の略号で注した。

※その後(ノの下)に、その曲の内容上の特色を略記したが、「整」に含まれる曲についてはそれとの本文比較の結果を、「整」にはなくて「偽」にのみ含まれる曲については「偽」との本文比較の結果を略記することを原則とした。

(なお、『能楽研究』14号に別稿の形で掲載した「車屋謡本」曲目一覧表が《菊屋本》について《菅丞相》が⑭1にあるように示したのは、《感陽宮》の誤りである。)

① A書風。四帖。墨付57丁。五番ともに「整」偽に含まれる近い曲。

放生川 k無・n無 「整」偽 ◎／ほとんど「整」と同文。

朝長 k無・n無 「整」偽 ◎／ほとんど「整」と同文。

江口 k有・n無 「整」偽 ◎／役名の「棹持」(ツレの一人)や2例の「くる」まで「整」と同じ。

百萬(百万(外)) k無・n有 「整」偽 ◎／直しは「中・下」各1例のみ。ほとんど「整」と同文。

通小町 k無・n無 「整」偽 ◎／ほとんど「整」と同文。前ツレは「偽」と同じく「つれ」(「整」は「女」)。

② A書風。四帖。墨付63丁。〈藍染川〉のみが遠い曲。

御裳濯 k有・n無 ◎「竜」

*籠 k有・n無 「偽」 ○「竜」／「偽」とほとんど同文。

湯谷 k無・n無 「整」偽 ◎／朝顔の着ゼリフとシテのサシを誤脱して補筆。ほぼ「整」と同文。

朝顔の役名「朝かほ」。「整」は「槿」。「偽」は「つれ」。

*藍染川 k無・n有 ◎「竜」／丁裏から。キリの文句二様。その注記まで「竜」と同じ。後文参照。

誓願寺 k無・n無 「整」偽 ◎／異書体に見えるほど詰めて書く。ほとんど「整」と同文。

③ A書風。四帖。墨付52丁。〈源大夫〉以外は近い曲。

源大夫(源太夫(外)) k無・n無 「偽」 ▲《吉川大本》「竜」／「偽」とほとんど同文。

恒正 k無・n無 ◎「竜」／ワキの名乗り、「平家の一門西国にて果給ひて…」が先の《下間本》の形。

小袖曾我 k無・n無 ◎「竜」／内題3行目(前曲余白なし)。

木賊 k有・n無 ◎「竜」

阿濃 k無・n無 [偽] ◎[竜] / [偽] とほとんど同文。

④ A書風。四帖。墨付48丁。第四帖第一丁欠。後表紙は改装で、⑭⑮の後表紙と同じ紙。〈箱崎〉以外は遠い曲。

玉の井 k無・n無 ▲《吉川小本》[竜]

箱崎 k無・n無 ◎

*岡崎 k無・n無 ▲《吉川小本》[竜]

護應(護法) k無・n有 ◎[竜] / [竜] と曲名同じく、本文もほぼ同じ。相互に誤写あり、役名も小異。

鶏立田(鶏龍田(内)) k有・n無 △[竜] / 侍女の狂乱を告げるヲカシのせりふを記載。「くる」3例。

⑤ A書風。四帖。墨付54丁。〈大會〉以外はやや近い曲。

白鬚 k無・n無 [偽] ◎[竜] / [偽] とほとんど同文。

国栖 k有・n無 [偽] ◎[竜] / [偽] とかなり異なり、《吉川小本》とほぼ同文。

班女(斑女(内)) k無・n有 ◎[竜] / 直し僅少。

*放家僧(放我僧(外)) k有・n無 ◎

*大會 k有・n有 [偽] △ / 直し僅少。「偽」とほぼ同文ながら小異あり。

⑥ A書風。四帖。墨付59丁。近い曲と遠い曲が混在。

養老 k無・n無 [整][偽] ◎[竜] / ほとんど「整」と同文。

愛寿 k無・n無 ▲《高安本》[竜]

雲林院 k無・n無 ▲《下間本》[竜] / 内題3行目(1行目が前曲末尾)。

殺生石 k無・n有 [偽] ◎[竜] / [偽] とは冒頭部がかなり違う。

安宅

k 無・n 無 [偽] ◎[竜] / 車屋本の文句の特色ほとんど消滅。「偽」ともかなり違う。

⑦ A 書風。四帖。墨付59丁。やや近い曲と遠い曲が混在。

難波梅

k 有・n 有 [整] ◎ / ほとんど「整」と同文。1例の「くる」は「整」では「しほる」。

* 撰待

k 有・n 有 ▲《野上本》[竜] / 《野上本》とほとんど同文。僅かな直しは「竜」とみな一致。

* 夕顔

k 無・n 有 [整] ◎ / ほぼ「整」と同文で、「是は」が「かやうに候者は」になる類の小異あり。

礎

k 有・n 有 ○[竜] / 直し僅少。

岩舟

k 有・n 無 [偽] ◎[竜] / 末尾2行は後表紙見返しにはみ出す。「偽」とほとんど同文。

⑧ A 書風。四帖。墨付58丁。五番ともに「偽」に含まれる近い曲。〈舍利〉以外は「整」にも。

呉服

k 有・n 有 [整][偽] ◎ / ほとんど「整」と同文。

* 八嶋〔屋嶋(内)〕

k 有・n 有 [整][偽] ◎ / 「整」になき着ゼリフあり、他はほとんど同文。

定家

k 無・n 無 [整][偽] ◎ / 「志本る」を併用。「整」とほぼ同文ながら2句分ナシ。誤脱か。

舍利

k 無・n 有 [偽] ◎[竜] / 「偽」とほぼ同文ながら小異あり。

三井寺

k 無・n 無 [整][偽] ◎ / 「整」の内題下の注記「狂言いひたて」や本文中の「シカく」ナシ。

⑨ A 書風。四帖。墨付59丁。〈檀風〉以外は近い曲。

竹生嶋

k 有・n 有 [偽] ◎[竜] / 直し僅少。「偽」とほぼ同文ながら小異あり。

* 鞍馬天狗

k 有・n 有 ◎

* 檀風

k 無・n 無 [偽] △[竜] / セリフの多い曲ながら「偽」とほとんど同文。

道明寺

k 有・n 有 ◎[竜]

金札 k有・n無 [整][偽] ◎／ほとんど[整]と同文。文字遣い酷似し、1例の「くる」も同じ所。

⑩ A書風。四帖。墨付53丁。五番ともに近い曲。

矢立鴨〔賀茂(外)〕 k無・n有 [整][偽] ◎／後半の直しに「越」多出。ほとんど[整]と同文。

鶴 k有・n無 [整][偽] ◎／ほとんど[整]と同文。1例の「くる」も同じ所。

*槿〔朝顔(内)〕 k有・n無 ◎[竜]

*忝虫〔松虫(内・外)〕 k無・n無 ◎[竜]

*善界 k無・n無 [偽] ◎[竜]／[偽]とは文句かなり違う。

⑪ A書風。三帖。墨付51丁。遠い曲とやや近い曲とが混在。

西王母 k無・n無 ◎[竜]

*鉢木 k無・n無 [偽] △／[偽]とは大異あり、《吉川小本》とほとんど同文。「鉢」字も共通。

*熊坂 k有・n無 [偽] ◎[竜]／[偽]とは全く別系で[竜]とほとんど同文。

大佛供養 k無・n無 ◎[竜]／内題2行目(前曲余白なし)。「竜」は後半に省略あり、他は同文。

霸亀〔鶴亀(内)〕 k有・n無 ▲《暁道本》／鶴・亀に役名なし。「王」を「して」に同筆で改変。後人の朱訂あり。

⑫ A書風。四帖。墨付51丁。近い曲と遠い曲が混在。

志賀 k無・n無 ◎[竜]／[竜]とほとんど同文。「竜」は着ゼリフが上欄加筆、《菊屋本》は本文。

野守 k有・n無 [偽] ◎[竜]／ワキは常陸国の山伏。「偽」(ワキは羽黒山の山伏)と相違が多い。

*鸚鵡小町 k有・n有 ◎[竜]

*皇帝 k有・n有 [偽] ◎[竜]／直し2例のみ。「偽」とは小異あり、同系とは言えない。

正存

k 無・n 有 ▲《吉川小本》「竜」／起請文は「わき弁慶」が読む。静の役名「女」。直し1例のみ。

⑬ A書風。三帖。墨付56丁。〈七騎落〉以外はやや近い曲。

吉野

k 無・n 有 ◎「竜」／前シテのサシの後に「下ゲ哥・上ゲ哥」と別の「上ゲ哥」を注記なしで続けて書く。曲舞部分は「さしごゑ」からの形。

俊寛

k 無・n 無 ◎「竜」／車屋謡本四種や「竜」にはないワキの一声謡「はや舟の心にかなふ追手の風、舟子やいとゝいさふらん」（上掛りとほぼ同文）を記載。

七騎落

k 無・n 無 ◎「竜」／「竜」と同系ながら冒頭の「狂言いひたて」を欠くなど所々を省略。小太郎の一声に続く二ノ句の役名を「狂言」とする。「竜」は役名ナシ。

張良

k 有・n 無 ○

大原御幸

k 有・n 無 ◎／「くる」4例

⑭ A書風。四帖。墨付63丁。五番ともにやや近い曲。

感陽宮

k 無・n 無 ○「竜」

谷行

k 無・n 無 「偽」○／「偽」とは文句かなり違う。

春日龍神

k 有・n 無 「整」「偽」◎／ほとんど「整」と同文。2例の「くる」は「整」では「しほる」。

春永〔春栄(内・外)〕

k 有・n 無 「偽」○／文句は「偽」とかなり違うが、1例の「くる」は一致。

右近

k 有・n 無 ○「竜」

⑮ A書風。三帖。墨付54丁。〈桜川〉以外は「偽」に含まれる近い曲。

天鼓

k 無・n 無 「整」「偽」◎／直し1例のみ。ほとんど「整」と同文。併用の「志本る」も同じ所。

西行桜 k有・n無 [整]偽 ◎/ほとんど「整」と同文。1例の「くる」も同じ所。

舟橋(船橋(内)) k有・n無 [整]偽 ◎/ほとんど「整」と同文。2例の「くる」も同じ所。

*桜川(桜河(内)) k無・n無 ○[竜]/文の前後は《吉川大本》《能楽研究》19号41頁参照)などと同形。

鐘道 k無・n無 [偽] ●[竜]/[偽]や[竜]と文句ほとんど同文。

⑩ A書風。四帖。墨付58丁。五番ともに「整」偽に含まれる近い曲。

蟹(泉郎(内・外)) k有・n有 [整]偽 ◎/ほとんど「整」と同文。「くる」は「整」にない所。

*柏崎 k有・n有 [整]偽 ◎/ほとんど「整」と同文。

卒都婆小町 k有・n有 [整]偽 ◎/ほとんど「整」と同文で文字づかいも酷似。「くる」も1例は一致。

籠太鼓 k無・n無 [整]偽 ◎/ほとんど「整」と同文。

*浮舟(浮船(外)) k無・n無 [整]偽 ◎/ほとんど「整」と同文。

⑪ A書風。四帖。墨付51丁。前表紙剥離し、その裏貼り・途中の1丁・後表紙欠失。《土車》以外は「偽」に含まれる曲。

藤渡 k無・n無 [整]偽 ◎/ほとんど「整」と同文。

花月 k無・n有 [偽] ●[竜]/第一丁欠失のため内題なし。直し多し。

*関寺小町 k無・n有 [整]偽 ◎/直し多く、「サラリト・少カロク」なども。ほとんど「整」と同文。

*項羽(⑫と重複) k有・n有 [偽] ●[竜]/重複する⑫分と小異あり、⑬分がより「偽」に近い。

土車 k有・n有 ●[竜]/途中の1丁遊離。ワキの「さしごゑ・上ゲ哥」は《卒都婆小町》と同文。

⑬ A書風。三帖。墨付54丁。《藤永》以外はやや近い曲。

嵐山 k有・n無 [偽] ○/[偽]とほとんど同文。

敦盛 k有・n無 [偽] ○[竜] / 内題2行目。[偽]と全く別系で《毛利本》や《田中東大本》と同文。

佛原 k無・n有 ◎[竜]

藤永 k無・n無 [偽] ▲《吉川小本》 / [偽]とは大異。《吉川小本》とほとんど同文。後文参照。

橋弁慶 k無・n無 ○[竜] / 内題2行目。

⑱ 第二帖までA書風。三帖。墨付54丁。第三帖は欠失したのを後人が補写。後表紙は改装。五番ともに近い曲。

邯鄲 k有・n有 [整][偽] ◎ / 「沈瀧の盃」の難字(『謡抄』所引)まで[整]と一致。4例の「くる」

の2例も一致(2例[整]は「しほる」)するが、「狂言の女いひたてあり」の注記なし。

遊行柳 k無・n有 ○[竜] / 「クリ」の指定あり。

*采女 k無・n無 [整][偽] ◎ / 第7丁まで第二帖。第8丁以下が後人補写分。ほぼ[整]と同文。

道成寺 k∴∴n∴ [整][偽] ◎ / 全体が後人補写分で間拍子入り。車屋謡本の特色皆無。

*三輪 k∴∴n∴ [整][偽] ◎ / 同右。

⑳ D書風。四帖。墨付48丁。題簽・扉題はA書風。五番ともにk・n皆無。《頼政》以外は[整][偽]に含まれる曲。

老杰(老松(内・外)) k無・n無 [整][偽] ◎ / ほとんど[整]と同文。

*頼政 k無・n無 ◎[竜] / 名乗リグリあり。語り冒頭は車屋謡本特有の簡略形ながら小異。

楊貴妃 k無・n無 [整][偽] ◎ / ほとんど[整]と同文ながら、言い回しに小異がある。

*小塩 k無・n無 [整][偽] ◎ / 「下京辺」が「上京辺」になる小異はあるが、「整」とほぼ同文。

*杜若 k無・n無 [整][偽] ◎ / ほとんど[整]と同文。

㉑ B書風で㉒と同筆。四帖。墨付58丁。前表紙は改装で題簽なく、④⑱の後表紙と同じ紙。五番ともに近い曲。

白楽天 k無・n無 [整]偽 ◎/ほとんど[整]と同文。

道盛 k有・n無 [整]偽 ◎/名乗りは[整]と小異。誤写か。他の所は同文。「くる」は違う所。

角田川 k有・n有 [偽] ◎[竜]直し詳細。貼紙・加筆の文句修正あり。原文は[偽]とほぼ同文。

末の「只しるしはかり」に「禅鳳後ノ本ニハのけられ候」と注記。後文参照。

*貴船(=鉄輪) k無・n無 ◎[竜]

項羽(17と重複) k有・n無 ◎[竜]重複する17分と小異。

② B書風で②と同筆。四帖。墨付67丁。五番すべて[整]偽に含まれる近い曲。末三番が右頁空白で左頁から。

融 k有・n無 [整]偽 ◎/ほとんど[整]と同文。「くる」は1例一致。1例は「しほる」の所。

真盛(実盛(内)) k有・n無 [整]偽 ◎/ほとんど[整]と同文。「くる」は[整]が「しほる」の所。

芭蕉 k無・n無 [整]偽 ◎/ほとんど[整]と同文。

錦木 k有・n無 [整]偽 ◎/ほとんど[整]と同文。「くる」は同じ所。

鵜飼 k無・n無 [整]偽 ◎/ほとんど[整]と同文。

③ C書風。四帖。墨付59丁。料紙は格別に厚い斐紙。五番とも[偽]に含まれる曲。〈高砂〉以外は右頁から書き出す。

高砂 k有・n無 [整]偽 ◎/ほとんど[整]と同文。2例の「くる」も同じ所。

*田村 k有・n無 [整]偽 ◎/ほとんど[整]と同文。「くる」は1例一致。1例は「しほる」の所。

*忞風(松風(内・外)) k有・n無 [整]偽 ◎/ほとんど[整]と同文。

*女郎花 k無・n無 [整]偽 ◎/「こなたへ御入候へ」を欠く以外は[整]と同文。

*狸 k無・n有 [偽] ◎/直し少々。「唐きむさん」で[偽](唐かねきんさん)とは小異2所のみ。

②4 E書風。三帖。墨付54丁。料紙は格別に厚い斐紙。五番すべてが「整」偽に含まれる近い曲。

弓八幡 k無・n無 「整」偽 ◎／着ゼリフを欠くなど小異はあるが「整」とほぼ同文。

忠度 k無・n無 「整」偽 ◎／ほぼ「整」と同文ながら、「行脚」が「修行」になる類の小異あり。

野、宮(の、宮内) k無・n無 「整」偽 ◎／末尾は「く」ではなく「くわたく」。他は「整」とほぼ同文。

黒塚 k有・n無 「整」偽 ◎／末尾に「くる」6例(「整」の7例の1例を脱)集中。着ゼリフなし。

善知鳥 k有・n無 「整」偽 ◎／ほとんど「整」と同文。

②5 A書風。四帖。墨付52丁。遠い曲と近い曲が混在。

伏見 k無・n無 ◎「竜」／ほとんど「竜」と同文。

小鍛冶 k有・n無 ◎「竜」／節付ナシの「竜」とは別系らしく、全体に小異が多い。

軒端梅 k有・n無 「整」偽 ◎／キリは下掛りの常の形。ほとんど「整」と同文。

*鈴木 k無・n有 ▲《国会本》／直し少々。《国会本》とほぼ同文ながら小異も多い。

*紅葉狩 k無・n有 「偽」 ◎／直し少々。朱筆訂正1ヶ所。女供のセリフを記載し、シテ名乗りの

一句がある他は「偽」とほとんど同文。

②6 A書風。四帖。墨付49丁。五番ともに「整」に含まれる近い曲。

当麻 k無・n有 「整」偽 ◎／ほとんど「整」と同文。

龍田 k有・n無 「整」偽 ◎「竜」／ほとんど「整」と同文。「くる」も同じ所(1例は「クル」)。

*玉鬘(玉葛(外)) k無・n無 「整」偽 ◎／ほとんど「整」と同文。併用する「志本る」も「整」と同じ所。

葛城 k無・n無 「整」 ◎／ほとんど「整」と同文。文字遣いも酷似。

羽衣 k無・n無 「整」偽 ◎／内題3行目。ほとんど「整」と同文。併用する「志本る」も同じ所。

②7 A書風。四帖。墨付55丁。五番ともに遠い曲。

調伏曾我 k無・n有 ◎「竜」／「竜」とほとんど同文で直しもほぼ一致。片仮名の「クル」は「竜」くる」。

*錦戸 k有・n有 ◎「竜」／直し多し。ツレ登場の文句を欠く以外は「竜」と同文で、「くる」も一致。

粉川寺 k無・n無 ▲《吉川小本》

舞車 k有・n有 ▲《吉川小本》「竜」

木曾 k有・n有 ▲《吉川小本》「竜」／「ヲカシ」のセリフあり。覚明のセリフに役名不記。

②8 A書風。四帖。墨付52丁。五番ともに遠い曲。

禅師曾我 k無・n無 ▲《吉川小本》「竜」／《吉川小本》とほとんど同文。

*清重 k無・n無 ◎「竜」／後半の二ノ句は「ヲカシ」の担当。「竜」とほとんど同文。

*伏木曾我 k無・n無 ◎「竜」／次第の反復記載まで「竜」と同文。

*知章 k有・n有 ◎「竜」

*葛城天狗 k無・n有 ●

②9 A書風。三帖。墨付50丁。《羅生門》以外の四番は「偽」に含まれる近い曲。

蟻通 k有・n有 「整」偽 ◎／直し「ソト・ヨク入・スム・同」など。一句以外は「整」と同文。

羅生門 k無・n有 △《国会本》／《国会本》とほとんど同文。

*井筒 k無・n有 「整」偽 ◎／直しは「不持・カケス」の2例のみ。ワキの名乗り(諸国一見の僧

「整」は「一所不住の僧」で初瀬詣での途中) 以外は「整」と同文。

源氏供養

k 無・n 無 [整] [偽] ○ / ほとんど [整] と同文。

蘆刈

k 無・n 無 [偽] ◎ [竜] / 本文は [偽] とはかなり違う。

③〇 A 書風。四帖。墨付55丁。〈松山鏡〉以外は近い曲。

舟弁慶

k 無・n 無 [偽] ◎ [竜] / [偽] とほとんど同文。

* 盛久

k 無・n 無 [偽] ◎ [竜] / 「いかに土屋殿」で始まる形で [偽] とほとんど同文。

富士太鼓

k 無・n 有 [偽] ◎ [竜] / [偽] とほとんど同文。

* 忞山鏡

k 有・n 有 ▲ 《野上本》 [竜] / ほとんど 《野上本》 と同文。

* 吉野静

k 無・n 無 ◎ / ワキ名乗り以外の前場の詞章ナシ。

〔三〕曲目をめぐって

《菊屋本》の五番の編成は、同じく五番綴の《下間本》(資料ナ)・《毛利本》(資料ヒ)・《田中東大本》(資料モ)・《吉川別本》(資料ユ)などと同様、いわゆる五番立式に、異なる曲趣の曲を組み合わせることを原則としているようである。脇能・修羅物・鬘物と続く形は①②⑧⑱⑳㉑㉒㉓㉔の七冊だけであるが、それに準じる形の③⑥⑦⑩⑫⑮⑲⑳㉑㉒㉓㉔を加えれば過半に達し、《吉川別本》ほどではないが他本よりは整った組み合わせになっている。その一方で現在能だけ集めた形の㉗や曾我物が重複する㉘のような例外もあるのは、全一五〇番で遠い曲が増え、曲柄のバランスが崩れているからであろう。

車屋謡本に古い曲名を採用する傾向が顕著であることの象徴が「相生」で、これまで考察した諸本はみな「相生」であったが、㉓では「高砂」の曲名が採用されている。他方、㉕の「軒端梅」(東北)や㉖の「貴船」(鉄輪)は古名また

は別名のみであり、⑩の「矢立鴨」が外題では一般的曲名の「賀茂」になっている例もある。曲名やその文字については、車屋謡本の特徴がやや薄れ、一般的な形が優勢になる過渡期の様相を示していると言えようか。

曲数が多いだけに、《菊屋本》には車屋謡本の諸本には含まれていなかった珍曲がかなり含まれている。「曲目一覽」に●・○印を添えた〈藍染川・護應(護法)・熊坂・大佛供養・志賀・七騎落・鐘馗・伏見・小鍛冶・調伏曾我・錦戸・清重・伏木曾我・葛城天狗〉の十四番がそれである。もともと、〈葛城天狗〉以外の十三番はすべて《竜大本》(竜)には含まれており、二倍近い番数を持つ「竜」と《菊屋本》とは、特に遠い曲においてかなり親近性が強い。これらの諸曲の詞章の系統がどうであるかは、先行する上掛り・下掛りの諸本と比較した上でなければ認定できないが、〈護法〉や〈伏見〉は上掛り(観世流)系の曲のほうである。が、▲印の内では遠い曲だけを集めた冊を含む《吉川小本》にのみ含まれる八番(玉井・岡崎・正存・藤永・粉川寺・舞車・木曾・禅師曾我)ほどに観世色が濃くはないように思われる。

遠い曲を多数含む一方、かなり近い曲で、他の車屋謡本揃い本や同じ頃の下掛り(金春系)の百番程度の揃い本には入っていることの多い〈葵上・歌占・姨捨・景清・兼平・清経・小督・佐保山・自然居士・昭君・千寿・東岸居士・花筐・檜垣・二人静・山姥〉などが《菊屋本》には含まれていない。これは気になる現象で、⑨のもとの第三帖が欠失していることや⑭などの一部の丁の欠失などを参照すると、もとはもう数冊あったのが散佚したことも考えられよう。現在の箱が揃い本作成当時の物か否かは明らかでないが、あと五冊ほどは楽に入る余裕がある。

〔四〕整版車屋謡本(整)・偽車屋本(偽)との関係

《菊屋本》が車屋謡本系であろうことを、「くる」の使用や車屋本系直しの存在などの節付面から第(一)項で推測しておいたが、他本との詞章比較などによる確認が必要であろうし、一五〇番にも及ぶ《菊屋本》の全体をそう認定してよ

寛永初年の間に限定できるので、抜き取り調査の予定を変更して多くの曲の詞章を比較してみたが、印象を裏付けるような結果は得られなかった。「整」と「偽」とが親子関係に近い本だけに、《菊屋本》が「整」と「偽」のどちらにより近いかの認定も容易でないし、中間的性質とは言いかねる異同例もあったからである。例えば①の《通小町》が前ツレの役名を「つれ」とするのが「偽」と同じで「整」の「女」と違っているのなどは、「整」よりも「偽」に近い例であるが、②の《湯合》のツレを《菊屋本》が「朝かほ」とするのは、「偽」の「つれ」とは違って「整」(種)と同じく、「偽」よりも「整」に近い例である。同曲の中に「整」に近い所と「偽」に近い所が共存している例もあるし、「整」よりも《菊屋本》が古い形と考えられる役名もあって、調査範囲を広げるにつれて混迷は深まるばかりであった。「整」と「偽」に共存する曲について《菊屋本》と比較する方法自体に無理があったのである。

混迷を脱却する手掛りになったのは、旧解題の誤れる記事であった。旧解題も「偽」には注意を払っていて、

……本文の性質は一様でなく、舟弁慶・隅田川・道成寺・盛久などは殆んど偽車屋本と同一であるが……

と、「偽」と本文が一致する曲の具体例(《道成寺》を加えたのは誤り。同曲は後人補写の分)を挙げた上で、別系の本文を持つ《春栄・安宅・鉢木・撰待・藤永・熊坂》などに言及して、車屋謡本系ではない曲が多く混在しているかのような誤れる論を展開しているのである。その「偽」とは別系本文の例に挙げられた六番の内の五番(《撰待》が例外で、「整」にも「偽」にも含まれない)までが「偽」には含まれるが「整」にはない曲であることが、まずそうした曲との比較によって《菊屋本》と「偽」との関係を明らかにすべきことを教えてくれた。

《菊屋本》の内で「整」には含まれず「偽」にのみ含まれる曲は、《艮・源大夫・阿濃・白鬚・国栖・大會・殺生石・安宅・岩舟・舎利・竹生嶋・檀風・善界・鉢木・熊坂・野守・皇帝・谷行・春永・鐘馗・花月・項羽・嵐山・敦盛・藤永・角田川・狸々・紅葉狩・蘆刈・舟弁慶・盛久・富士太鼓》の三十二番に達する。その内の傍線を引いた十八番は

「偽」と文句がほとんど同じか小異にとどまっているが、その大半はセリフが少なくして諸本間の異同も少なく、文句が一致しても同系とは言えない曲である。セリフが多いのに「偽」とほとんど同文なのは〈檀風・角田川・舟弁慶〉だけであろう。特に〈檀風〉は、格別にセリフが多くて変動の生じ易い曲であるにもかかわらず、「偽」が「シカ／＼」をすべで省略しているのを除けばほとんど全く文句が一致し、この曲に関しては《菊屋本》と「偽」とは極めて近い関係にあると言わねばなるまい。〈角田川〉や〈舟弁慶〉にもほぼ同じことが言える。

だが、より目に立つのは、右の三十二番に「偽」とは別系統と見られるほど多くの異文を持つ曲(傍線なしの分)が十四番も含まれていることである。異文とは言っても、総じて変動の幅の狭い謡曲詞章のことゆえそう大きな違いではないが、小異ではあっても別系統を思わせる異文がある曲には傍線を引いていない。例えば⑫の〈野守〉のワキは「是ハ常陸国より出たる山臥にて候」と名乗るが、「偽」のワキは「出羽国羽黒山より出たる山伏」である。山伏でさえあればどちらでも大差ないとも言えるが、名乗りに続く道行の上ゲ哥は両本とも「此程の宿かしまの、草枕」と始まる。「鹿島野」が掛詞に使われているのは、ワキが常陸出身ゆえの縁語のはずで、「偽」の形はそれを忘れた改訂に相違ないから、仮に相違がここ一ヶ所であっても別系の本文としなければなるまい。別系であることはワキの次第の有無や道行の異文などに代表されることが多く、⑬の〈敦盛〉は「偽」にはあるワキの次第がない。同じ⑬の〈藤永〉のワキの道行は、「城南の離宮に…」で始まる「さしこゑ」の後に下ゲ哥・上ゲ哥が続く長文(〈忠度〉がほぼ同文)であるが、「偽」はどの曲のワキ道行にも流用できる短い上ゲ哥だけになっている。〈野守・敦盛・藤永〉の三曲ともに他の部分にも異文が多く、曲全体が別系の本文であることをワキの部分の異同が象徴している形なのである。そうした明確に別系と認定される曲が十四番もある以上、《菊屋本》は、一部には〈檀風〉のような近い関係の曲を含むものの、「偽」の全体とはさほど密接な縁を持っていない——「偽」を参照してはいない——と考えるのが妥当であろう。

右に《菊屋本》が「偽」と直接的な関係を持たないと確認したことは、続いて試みる《菊屋本》と「整」との関係の考察に役立った。「偽」とは縁が薄いことを確認してあれば、「整」と「偽」に共通する曲(両本同文)が《菊屋本》でも同文の場合、《菊屋本》が「整」と密接な縁があることを示す材料として評価してよいことになるからである。従って、以下の考察では一々「偽」も同文であることには言及しない。

さて、「整」と《菊屋本》との関係はどうであろうか。《菊屋本》と「整」とで重なり合う六十一番は全曲を比較してみたが、⑧の〈八嶋〉に「整」にはない着ゼリフがあり、⑭の〈弓八幡〉は逆に「整」にある着ゼリフを欠くといった程度の出入——着ゼリフは謡本で省略されることがすこぶる多い——が文言の面での最も目に立つ相違点であり、全曲が同系統の本文であると言って差し支えないほど密接な関係にある。⑯の〈卒都婆小町〉の『玉造小町壮衰書』に基づく文言のむつかしい漢字がほとんど一致し、⑲の〈邯鄲〉の「かうかいのはい」に『謡抄』が指摘した『韻会』に基づく「沈澁(の盃)」の難字が共通して使用されている(ただし《菊屋本》の「沈」は「流」に近い。写真106参照)など、「整」「偽」の関係に近いほど文字遣いが酷似している曲もある。節付の面でも、車屋謡本相互の間にも不一致のことが多い「くる」が同じ所に使用されている例がすこぶる多いし、通常の記号化した「しほる」とは別に鳥養道晰が《毛利本》の前後から併用し始めたらしい「志本る」(『能楽研究』17号22頁参照)も、⑮の〈天鼓〉や⑳の〈玉鬘〉〈羽衣〉では同じ所に存在する。

《菊屋本》の「整」と重なり合う全曲が「整」を直接的な底本としているわけではないことは、約二十曲に存在する文言の小異や、かなり多い「くる」の不一致や、役名の相違などから明らかであるが、文言に小異がある曲でも文字遣いや節付の微細な面に「整」の影響を思わせる点が存在することが多く、全体的に《菊屋本》が「整」の影響下にあることは確かと思われる。書風の別によって《菊屋本》の書写態度に差があることは前述したが、比較的丁寧な書写態度のA書風で書かれた㉑などは、五番すべてが「整」からの転写に近いほど酷似していて、〈当麻〉のクセの指定が「整」では「下」

だけなのが②では「曲下」になっている程度の違いしかない。「整」が全体的に参照され、一部には「整」を底本として書写された曲も含まれているのが、「整」と《菊屋本》との関係の実態なのではなからうか。

後述するように、《菊屋本》には写本の車屋謡本と密接な関係にある曲も含まれ、同じ車屋謡本ゆえそれらの写本と「整」とは同文であることが多いから、文言の一致だけでは《菊屋本》は「整」とは縁が深いとは言えないが、文字遣いや節付まで比較してみれば、他の写本より「整」が《菊屋本》に最も近いのが常である。すべての写本と比較したわけではないし、⑦の〈夕顔〉(ワキ名乗りの「是は」が「かやうに候者は」になる)のような意識的改変らしい例外も少しはあるが、「整」に含まれている曲ならば、《菊屋本》は大半が「整」と最も近い関係を持っていると言えるようなのである。

〔五〕写本の車屋謡本との関係

前項で《菊屋本》が「整」と密接な関係があることを指摘したが、「整」と重なり合う六十一番は《菊屋本》全体の四割に過ぎない。六割を占める他曲についてもその性質を考察しなければなるまい。

《菊屋本》の一五〇番の内、写本の車屋謡本のいずれかに含まれている曲は一二六番で(「曲目一覧」の◎印十三番と●印一番だけが例外)、「整」の分を除いても七十五番もある。その全部について多数の写本と比較する時間的余裕がなかったので、「偽」との比較の段階で調査した分と、一種類の写本にだけ含まれる曲(「曲目一覧」の▲印)を主体に、《菊屋本》と写本とを比較した結果を報告しておこう。セリフが多くて文句に変動の生じ易い曲に主として言及する。

④の〈岡崎〉は、写本では《吉川小本》にのみ含まれている。その《吉川小本》の末尾に「次郎権守作也」と注記があり(次郎権守は観世信光)、鳥養道晰が観世系の詞章を節付だけ下掛り風に変えて転写した曲に相違ないが、その観世系の文句が④にもほとんどそのまま継承されている。《吉川小本》では「神主」なのを「わき」に変更しているなど役名

にやや異同が多く、文句にも「御座候」を「候」にしている類の小異はあるが、ほとんど同文に近い。その他、㉓に連続する〈粉川寺〉〈舞車〉〈木曾〉や㉔の〈禅師曾我〉など、▲印の分で《吉川小本》にのみ存する曲はすべてそれとほとんど同文である。⑪の〈鉢木〉や⑬の〈敦盛〉〈藤永〉は「偽」にも含まれる曲であるが、「偽」とは大きく文言が違い、〈鉢木〉は《吉川小本》や《田中東大本》と（鏝(サビ)たりとも）「鏝長刀」の特異な文字も共通）、〈敦盛〉は《毛利本》や《田中東大本》と、〈藤永〉は《吉川小本》とほとんど同文である。総じて《吉川小本》と縁が深いようで、車屋謡本の諸本間で本文に差異の大きい〈角田川〉や〈吉野静〉が《吉川小本》に一致するのなどが目に立つ。《野上本》とのみ共通する⑦の〈撰待〉や⑩の〈松山鏡〉は《野上本》と同じく、《下間本》とのみ重なる⑥の〈雲林院〉は節付皆無の《下間本》の同曲と同文であって、文言を比較した《菊屋本》の諸曲は、稀に存在する誤写らしい所を除けば、すべて写本の車屋謡本のどれかとほとんど同文であった。比較しなかった曲——多くは詞章の変動の少ない曲——もほぼ同様であると推測していいであろう。「整」と重複する分のみならず、写本と重なり合う曲もまた大半が車屋謡本と同文に近いのであるから、《菊屋本》の全体が車屋謡本系の揃い本であることは明確であると言ってよからう。

〔六〕《竜大本》〔竜〕との関係

整版車屋謡本と重なる曲、写本の車屋謡本に含まれる曲と考察してきたので、残るのは車屋謡本のどの本にも含まれていない十四番——「曲目一覽」の◎印の分十三番と●印の一番——だけである。それについても考察しておこう。《菊屋本》の●印の一番は㉔の〈葛城天狗〉である。この曲は車屋謡本や同系本に含まれないだけでなく、江戸期の版本でも文化三年(一八〇六)須原屋刊の喜多流外組本以外には入っていない曲である。従って下掛り謡本としての同曲の系統も把握しにくい。近刊の『観世文庫蔵(室町時代謡本集)』所収の観世流謡本と文化本との中間的詞章で、鴻山文

庫蔵の「了随本」(慶安く明暦頃の写本)とはほぼ同文である。この曲は江戸初期に喜多流の演目だったから(『寛文諸流演目書上』)、そのことが背景になっての(葛城天狗)採用かも知れない。

《菊屋本》の○印の十三番はすべて「竜」に含まれている。「竜」が全一八三番の大部な本であることを考慮しても、この重複の度合いの高さは、両本が密接な関係にあることを推測させる現象と言わざるを得まい。調査の結果もその推測を裏付けるが、やや複雑な様相を示し、例外も含まれるので、「竜」との比較結果を具体的に記しておこう。

②の(藍染川)は、本文がほとんど同文であるのみならず、キリの文句に二様を併記し、先に書いた「安養止」の文句の末に「祝言ノナキ時ハ此キリニテ置也 又祝言ヲ謡時ハコレ不謡」と注して常の文句を続ける点まで「竜」と同じである。「竜」の方がより詳細な直しも重複分はほとんど一致し、一方を底本にして他方が転写したかに見えるほど近い関係にあるが、「我此道場如帝珠……頭面接足帰命礼」の祈り言葉の四句を、「竜」は初めからすべて漢字で本文を書き、《菊屋本》は本文は大半平仮名で書き、欄外に漢字で四句を加筆している(写真107)。《菊屋本》が先行することを思わせる形と言えよう。④の(護應(護法))は、一方の誤写に基づく小異はあるがほぼ同文で、曲名文字も同じであるが、「竜」の「山伏」が「わき」になっているなど、《菊屋本》は役名に差異や不備がある。⑪の(熊坂)は旧解題が「すべての版本の詞章と相違し、現行金剛流の文句と殆んど同じ」と指摘しているが、「竜」ともほとんど同文である。ただし、《菊屋本》で「面目もなき物語」なのが「竜」には「面白き物語」とあり、文意からは「竜」が誤写した形と考えられるが、現行金剛流も「面白き」である。慶長十・十一年奥書を持つ能楽研究所蔵の岩本雅楽助秀清本の(幽霊熊坂)がそこを「面白くもなき物語」としているのが誤写の過程を示し、それを意識的に改変したのが「面白き」であろうが、「竜」のみならず金剛流の詞章の性質を考える上でも注意すべき異文であろう。⑬の(大佛供養)は、前半がほとんど同文なのに、後半ではワキとツレがシテの正体を詮索する問答が「竜」に一切ない。《菊屋本》の形に基づく省略と考

えられる。右に見た〈藍染川・熊坂・大佛供養〉ともに《菊屋本》の方が《竜大本》よりも先行するか原形に近いと考えられる差異であるが、それを両本全体の関係に直結はできない。後に触れるように逆の関係の曲もあるからである。

⑫の〈志賀〉、⑮の〈鐘馗〉、⑲の〈伏見〉などは「竜」とほとんど同文であるが、もともと詞章に変動の少ない曲であり、あまり参考にはなるまい。⑬の〈七騎落〉は基本的には「竜」と同系の本文であるが、《菊屋本》は冒頭の「狂言いひたて」のセリフなど所々を省略している。小太郎の一声に続く二ノ句の役名「狂言」を「竜」が欠くのは誤脱であろう。⑳の〈小鍛冶〉は「竜」が節付皆無の曲であるが、全体に小異が多く、この曲だけは「竜」と《菊屋本》とは別系統の本文と認められる。㉑の〈調伏曾我〉は直しまでほとんど「竜」と一致する。《菊屋本》に1例片仮名の「クル」があるが、「竜」では「くる」の所である。同じ㉑の〈錦戸〉は、ツレ登場の一文が抜けている(誤写か)以外は「竜」と同文で、「くる」も同じ所である。㉒の〈清重〉〈伏木曾我〉ともに「竜」とほとんど同文で、〈伏木曾我〉は次第の文句を反復記載する点——それは《菊屋本》の特色の一つであるが、「整」に基づく曲以外では「く」で済ませる例も多い——まで一致している。

以上、《菊屋本》で「竜」とのみ重なり合う十三番について本文比較の結果を略述したが、小異の多くは一方の誤写に基づくと考えられる性質のものであるから、〈小鍛冶〉を除いてすべて同系の本文を持ち、〈七騎落〉と〈大佛供養〉以外はほとんど同文である上に、〈藍染川〉や〈調伏曾我〉のように微細な車屋謡本系直しまで一致する曲もあるのであるから、《菊屋本》は遠い曲において「竜」と極めて密接な関係にあると言わざるを得まい。

そのことは比較の対象を◎印以外の曲に広げてもほぼ同様であった。例えば③の〈恒正〉(◎印)のワキ名乗りが《下間本》と同形なのは「竜」もそうであり、⑬の〈吉野〉(◎印)が前シテのサシの後に下ゲ哥・上ゲ哥の形と別の上ゲ哥だけの形を注記なしで列記するのも「竜」と同じであり、車屋謡本では《野上本》にだけ含まれる⑦の〈撰待〉は「竜」とも同文で、そう多くはないが直しは「竜」と一致するものばかりなのである。

だが、例外も幾つかあった。⑩の〈吉野静〉(◎印)はワキの名乗りからすぐ衆徒との問答になる形で前場を欠くが、「竜」ではワキの次第・サシ・上ゲ哥からシテ静との問答になる完形である。⑬の〈俊寛〉(◎印)にあるワキの一声は、現行下掛り三流の一声とは違って(金春流が似る)上掛りの文句と酷似するが、車屋謡本四種にも「竜」にも一声謡はない。⑯の〈安宅〉(◎印)は車屋謡本の特徴を失って「偽」にかなり近づいた文句であるが、「竜」は写本の車屋謡本と全く同文である。〈吉野静〉は〈吉川小本〉が《菊屋本》と同文、《下間本》《毛利本》《吉川大本》が「竜」と同文であるから、車屋謡本の詞章流動の範囲内と言えるが、〈俊寛〉や〈安宅〉は《菊屋本》が車屋謡本から遠ざかっていることになる。

右に見たような例外も含まれるものの、《菊屋本》が「竜」と極めて近い関係にあることは、「整」との親密さと言い、◎印の曲の重複の度合いや微細な直しの一致と言い、否定すべくもあるまい。鳥養道晰やその子新藏との直接的な縁を見出だせないため、共に車屋謡本とは認めずに車屋本系謡本と位置づけたものの、同系本の中でも格別に親密な間柄にあるらしいのが《菊屋本》と「竜」なのである。遠隔の地に伝来したこの両本になぜにかくも共通色が濃いのか、その背景についての推測は次項に譲ろう。

〔七〕《菊屋本》についてのまとめ

資料リ《菊屋本》について、車屋謡本の揃い本以上の紙数を費やして検討してきた。あまりにもあれこれと多くのことに言及し、何が重要な指摘なのか不鮮明になっているように思われるので、《菊屋本》の性質についての要点を列記しておこう。

a 《菊屋本》は五番綴三十冊百五十番の揃い本で、車屋謡本系諸本の中では資料ラ《竜大本》に次ぐ規模を持つ。

b 六十番の節付に「くる」が使用され、四十七番に車屋本系直しが存在するという節付面からだけでも、車屋謡本

系の本であることが把握できる。

c 番数が多いだけに、どの車屋謡本にもない遠い曲が十四番も含まれている。その反面、当然入っていないような曲が十六番も含まれていないから、もとはもっと多数冊だった可能性もある。

d 曲目の編成に整版車屋謡本(「整」)や偽車屋本(「偽」)を参照したことを思わせる片寄りがあるが、文句に変動の多い曲を比較した結果から、「偽」は参照していないと認められる。

e 整版車屋謡本(「整」)とは、全体的に縁が深く、一部は「整」を底本にして本文が書写されているらしい。

f 「整」と重ならない曲で写本の車屋謡本のどれかに含まれる七十五番は、小異はあるがいずれかの写本と同文に近い曲が大半で、《菊屋本》全体が車屋謡本系であることを明示している。特に《吉川小本》と一致する曲が多い。

g 写本の車屋謡本に含まれない十四番の内の十三番が資料ラ《竜大本》と重なり、《小鍛冶》以外の十二番が本文も同系であり、微細な直しまで一致する曲もあって、《菊屋本》が《竜大本》と密接な関係にあることが推測される。

h 《菊屋本》と《竜大本》との密接な関係は、写本の車屋謡本に含まれる曲について見てもほぼ同様であるが、《安宅》が《菊屋本》だけ車屋謡本の特色を失った本文になり、《俊寛》にどの車屋謡本にも《竜大本》にもないワキ一声があるなどの、顕著な例外も存在する。

右のように特色を列記してあらためて痛感するのが、《菊屋本》と《竜大本》の縁の深さである。車屋謡本系の(「b」)、番数の多い本で(「a」)、遠い曲を多数含む(「c」)点が共通するのみならず、eの「整」と密接な関係を持つ点は《竜大本》が「整」と写本との混在する本である事実とつながりがあるうし、fの《吉川小本》と文言が一致する曲が多い点も、前節の(七)で考察した《竜大本》の遠い曲と《吉川小本》との関係に通い合う。それに《竜大本》との関係であるg・hが加わる。hに言及した顕著な例外もあるので全曲にわたるとは言えないが、全体的傾向として《菊屋本》と《竜大本》とに共通色

が濃く、両本が近似した性質の本であることは明確である。《藍染川》のように、キリの二様の詞章を列記し、それについての注記まで同文で、しかも車謡本系直しまで一致する曲が共存しているから、一部の曲は親子か兄弟に近い関係にあり、「共通色が濃い」などの表現では済まさない密接な関係にあると考えるなければなるまい。

前節の「(八)《竜大本》についてのまとめ」では、《竜大本》は鳥養道晰およびその後継者の所持していた本——鳥養家伝来本——に基づいているのではないかと、数多い車屋謡本系の本の中でも「鳥養道晰系」とでも呼ぶべき本流の系統の本ではないかと推測した。その《竜大本》とすこぶる近似した性質を持つ《菊屋本》についても、同じことを推測したい。鳥養家伝来本に基づいていると——具体的には道晰の後継者が編纂・節付に参与して《菊屋本》が成立したと——考えれば、《菊屋本》の多様な性質もすべて納得できるからである。「整」や《吉川小本》と一致点が多いことは勿論であるし、例外的な諸現象も道晰の後継者らの改訂に伴うこととして説明が可能となる。便宜的な推測とのそしりがあるろうことは《竜大本》の場合と同様であるが、比較・調査の対象を広げるにつれて漸次その感を強めてきたことなので、最後にその推測説の傍証的なことに言及しておこう。

《菊屋本》の編纂に鳥養道晰の後継者が関与しているのではないかと考えた第一の手掛りは、全体の節付が一筆と認められ、その節付が、道晰風のすこぶる慣れた筆致で施されていることである。「整」や写本の車屋謡本との比較の際に、本文はほとんど一致しているのに、役名(その書き入れも節付の一部)や節付記号には差異がある例——一方が「しほる」、一方が「くる」など——がしばしば見られ、幾つかの曲についてはその由を指摘しておいたが、それは車屋謡本風の節付に慣れた人が自由に節付を施したために生じた差異と認められる。それが道晰節付に相違ない本相互の間に存在する差異と同質で、脱落があったりはするが車屋謡本風節付の範囲内での出入に過ぎないからである。こうした節付を施し得るのは、道晰自身か彼の謡の後継者以外にはなからうが、慶長七年に没した道晰自身の節付であ

る可能性はまずあるまいから、道晰の後継者の関与を想定したのである。弟子筋の人でもいいが、《吉川小本》またはその転写本を参照していると認められる点からは、道晰の子弟の可能性がより高かろう。長男らしい新蔵はじめ、道晰には彦蔵・忠介・与太郎らの男子がいた(『言経卿記』)。彼らが新蔵と同じく謡本の節付に携わったか否かは明らかでなく、その可能性も否定できないものの、実績のある新蔵の関与を想定するのが最も自然であろう。

もう一つ、鳥養家伝来本としか考えられない本が《菊屋本》の底本に採用されたか参照されているらしいことである。それは②の(角田川)であるが、この曲の文句が車屋謡本諸本の間で変動の幅が大きいことについては、《吉川大本》の考察に言及し(第二章八。『能楽研究』19号35頁)、《竜大本》の考察の中でも触れた(40頁)が、《菊屋本》の同曲は、もとの本文は若干の誤写らしい点を除けば《吉川小本》とほとんど同文(一ヶ所は傍記による訂正もそのままの形)なのを、ワキツレ商人到着後のワキ船頭との問答(車屋謡本は諸本ともにそれを省略)や、「それはまさしくわが子にて候」の改訂文句(今の金春流の形)を貼紙で補い、別に傍記の形で誤写の修正と改訂文句とを加筆しており、車屋謡本諸本にはないワキの語りの「我名ハ梅若丸生年十二歳に成候」の肝要の文句も傍記で加筆されている。その文句が能楽研究所蔵の金春元安自筆本にはあり、文字遣いまで同じであることも金春元安(禅鳳)本との関わりを思わせるが、より重要なのは最末尾の、

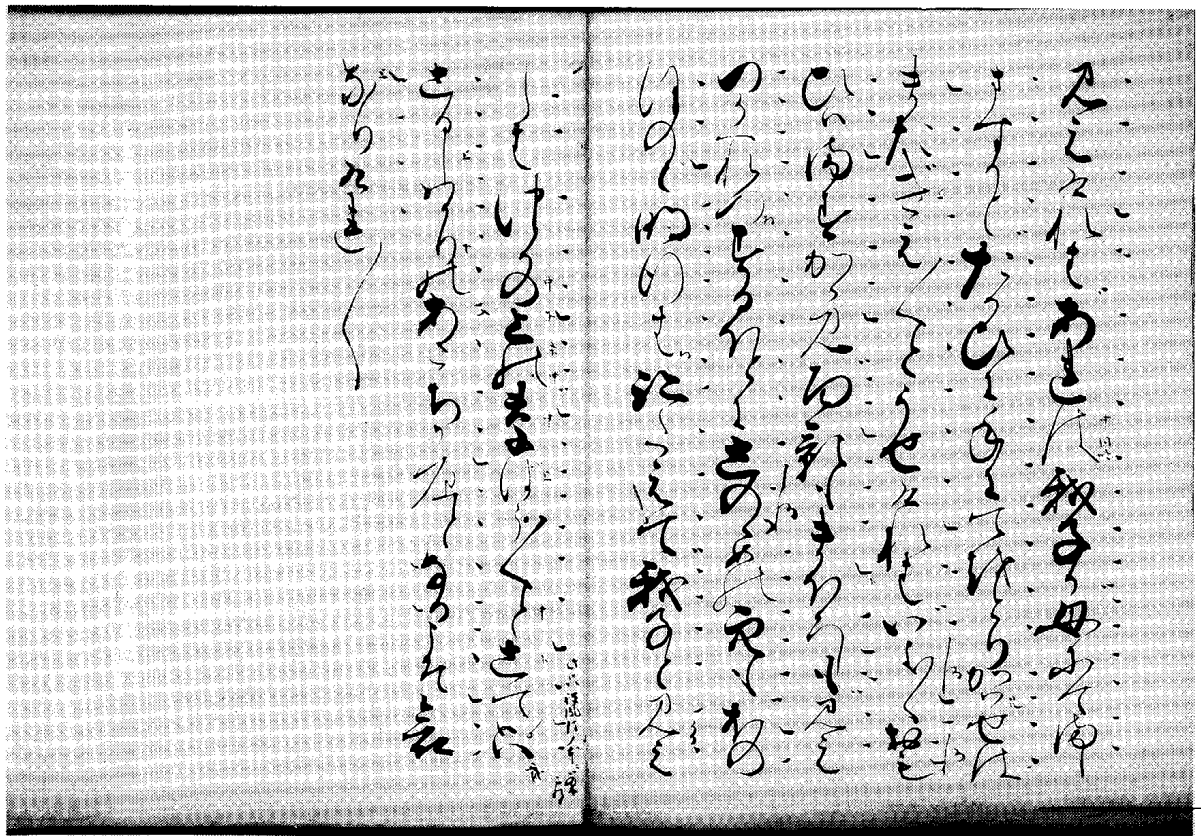
草ばうくとして只しるしハかりのあさちか原となるこそ哀なりけれく

の「只」に丸印を添え、「此只禅鳳後ノ本ニハのけられ候」と注記を加えていることである。(写真112)

右の「只」は現行諸流にはあるが、車屋謡本や同系諸本では出入のある一語であった。うかつにも《菊屋本》の注記を見るまではそのことに気づかずにおり、あわてて調べて見たところ、《吉川小本》《野上本》《田中東大本》《竜大本》には無く、《毛利本》《吉川大本》《徴古館本》には有るのである。かかる複雑な出入の根源が金春禅鳳本にあったことを、

右の注記は教えてくれる。能楽研究所蔵の金春元安奥書本は、「只」が無くて「禅鳳後ノ本」と同形である。元安時代の本がそうである以上、禅鳳と称するようになった晩年(永正末年頃)になって「只」を除いたことは考えにくい。「禅鳳後ノ本」とは言っても、その「禅鳳」は「元安」時代を含む金春大夫三世(禅竹から数えて)を意味する後人慣用の呼称であり、奥書に禅鳳の署名があった本と狭く解すべきではあるまい。先に入手した「前ノ本」に対して後に入手した本を「禅鳳後ノ本」と言ったに近い用法で、書写年代の前後とも恐らくは無縁であろう。禅鳳筆(または節付)の謡本で年記のある本は希有であり、現存本にはその例がない(大正四年刊『禅竹集』口絵の永正十五年元安奥書「熊野」は大正震災で焼失か)ことも参照される。その見地からは、《吉川小本》《野上本》《田中東大本》には「只」が無く、《毛利本》《吉川大本》にそれがあるという車屋謡本諸本間の《角田川》の差異も、諸本の先後関係とは結びつけにくい。《毛利本》は文禄四年四月、《吉川大本》は文禄五年一月の奥書のある冊に《角田川》が含まれている。一方《吉川小本》の《角田川》を含む冊は、豊臣秀吉の吉野遊山に伴って文禄三年二月初演された新作能《吉野詣》が含まれ、末尾には文禄五年六月十三日に山科言経が新作した小謡が追記されていて、文禄四年前後の書写が確実視される冊である(『能楽研究』14号95頁以下参照)。ほぼ書写年次を同じくするのに「只」の有無の差異があるわけで、車屋謡本としてどちらが先行する形かの認定が容易ではないのである。《吉川大本》が奥書年記よりは早い時期の本に基づいているらしいこと(『能楽研究』19号45頁)や、《野上本》《田中東大本》が比較的後年の書写らしい点からは、「只」のある形が先行し、「禅鳳後ノ本」を入手した以後にそれに基づいてそれを削除した可能性がより強いとは思いますが、仮にそうであっても、それは《角田川》についてのみ言えることで、揃い本全体の先後関係に適用できることではない。揃い本に含まれる曲の性質が多様で、一部の曲の性質から全体を推し量ることの危険性は、《竜大本》や《菊屋本》の考察を通していやといふほど味わわされたことであった。

それはともかく、前述の注記が「後ノ本」で除いたと言うのは「前ノ本」にはあったことを同時に意味しようから、この注記は禅鳳筆の二種の〈角田川〉を見た人であれば書けないはずである。しかもその有無が車屋謡本の諸本にそのまま反映しているのである。注記の原筆者は鳥養道晰(または新蔵)以外には考えられまい。前述の《吉川大本》の考察の中で、文禄五年一月の奥書のある同本の〈角田川〉になって初めて金春元安本系の本文に変更されている事実に基づいて、文禄四年後半に鳥養道晰が元安本系の〈角田川〉の写本を入手したろうことを推測し、車屋謡本に金春禅鳳の詞章を重んじる傾向が顕著なことをも〈道成寺〉などを例に指摘しておいた。禅鳳の節付を参照したことを注記した曲があることも早くに言及済みである(第二章三。《下間本》の考察。『法政大学文学部紀要』33号63頁)。右の注記が道晰または子の新蔵によって書かれたものの転載であることは、確実視していいことであろう。となると、その注記を持つ《菊屋本》の〈角田川〉は、鳥養家伝来本を底本としたか、それを参照して注記を転



②①の〈角田川〉の末尾

載したかのいずれかであると考えざるを得まい。そのことが、《菊屋本》への鳥養家伝来本の影響、具体的には道晰の後継者の関与を想定したい理由の一つである。先の《竜大本》の考察の末尾に述べた「鳥養新蔵が関与しているのではないか」との疑問は、《菊屋本》の考察を加えていっそう深まってきたのである。

《竜大本》の考察の末尾部分(48頁)で、《竜大本》と《吉川小本》とが密接な関係にあるのに、一方は本願寺に、他方は岩国吉川家に伝来したことを問題にしてあれこれ推測したが、《竜大本》と萩の旧家に伝来した《菊屋本》についても同じ問題がある。だがこの点は、鳥養道晰が本願寺とも毛利藩とも縁があったのを子の新蔵が継承していたことが想定されるので、さほどの障害にはなるまい。鳥養新蔵が本願寺でも萩や岩国でも謡を教えていた事態を想像してもいいであろう。江戸初期の毛利藩の能大夫が春日姓であり——寛文八年(二六〇)に喜多流の竹本八郎兵衛が召し抱えられるまでは春日八右衛門が大夫だった(竹本幹夫氏「江戸時代諸藩における能役者の身分」『国文学研究』平成4年10月)——、脇方が天正十六年(二六〇)の毛利輝元上洛の時以来宝暦十二年(二六二)の『改正能訓蒙図彙』の時代まで寅菊姓であって、春日も寅菊も先祖は本願寺系統の能役者であることも、本願寺と毛利藩の双方に同じ性質の謡本が伝来した背景の一つとして考慮していいことであろう。

残念ながら、《竜大本》や《菊屋本》に鳥養新蔵が関与しているのではないかとの疑問には、右に述べたような傍証的なことを指摘できるだけで、決め手を欠いている。が、この推測にはこだわり続けたいと思う。

最後に追加しておきたいのは、《菊屋本》は多くの曲の詞章が他の車屋謡本と同じく、車屋謡本系には相違ないものの、一部には江戸初期の能界の実態に近づけて車屋謡本独自の色彩の薄まっている曲も含まれていることである。第(六)項の後半に例外として指摘した《俊寛》や《安宅》がその好例である。鳥養道晰がこだわり続けたはずの「相生」の曲

名が㊸で「高砂」に変更されているのをその象徴と見てもよいであろう。謡のテキストであると同時に能の台本でもある謡本が、実際の演能の形に合わせる傾向を持つのは自然なことである。鳥養道晰の時代には謡のテキストの面を表に押し出して古名の「相生」で通せたが、祝言第一の能としてもっぱら「高砂」の名で多演されるようになった子弟の時代(慶長後半以後)には、能の実態に合わせて「高砂」の曲名を採用せざるを得なかったであろう。〈俊寛〉や〈安宅〉も下掛り三流の演じ方に近づいた改変なのである。そうした推移を考察するについての絶好の資料が〈道成寺〉である——車屋謡本には金春元安本に基づいて「僧が日高川を泳ぎ越して道成寺へ逃げて来た」由の無理な文句を含むが、江戸期の諸本はそれを削っている——が、㊹の〈道成寺〉は後人補写分であって利用できない。そのもとの一帖が欠失していることが、返す返す残念である。

資料リ《菊屋本》は能楽研究所所蔵本である。しかも旧解題のような理解にとどまっていたため、格別に貴重視してはおらず、実物を手にして親しく調査することができた。以前から気にかけていた旧解題の不備を是正しなければと、気持も強かったので、予期以上に深入りした考察になってしまった。車屋謡本系諸本の中でも屈指の善本であることに気づいたのは深入りの成果である。今後は貴重本に加えなければならぬ。